

ゲルマン語強変化動詞IV, V類の過去複数形をめぐる 考察

田中, 俊也
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1786394>

出版情報 : 英語英文学論叢. 63, pp.67-112, 2013-03-18. 九州大学英語英文学研究会
バージョン :
権利関係 :

ゲルマン語強変化動詞 IV, V 類の 過去複数形をめぐる考察*

田中俊也

ゲルマン語強変化動詞の過去形については、印欧祖語の完了形を継承しているという考えが一般的である。強変化動詞 I, II, III 類の過去形については、単数形・複数形双方ともこの見解から簡明な説明が可能である。しかしながら、強変化動詞 IV, V 類については、その過去複数形では延長階梯の母音 (PGmc. *-æ-) が語根に生じ、印欧祖語では語根母音がゼロ階梯となる完了複数形とは、形態的に一致しないように見える。この点についてどのような説明ができるか、これまで様々な学者が提案を行ってきた。それらの説についてどのような未解決の問題が残っているかを、本稿では考察したい。特に「語根アオリストとの混交説」と「完了形のみ由来する説」を取り上げて、そこに残る問題を論じたい。そして、今後の新たな研究の展開として「未完了形との混交説」の可能性を考えることとしたい。

キーワード：ゲルマン語、強変化動詞 IV, V 類、過去複数形、
延長階梯母音、ナルテン未完了形

第1節 はじめに

ゲルマン語の強変化動詞の過去形の由来について、従来最も有力な説として、印欧祖語の完了形に遡るとする見解がある。Prokosch (1939: 160) は、そのような考えを「標準的見解」(the Standard View) と呼んでいる。¹ 今日に至るまで、この考えは「標準的見解」と言えるほど一般的である。²

この見解から最も分かりやすく説明ができるのが、強変化動詞 I～III

* 本稿は、2011年12月18日(日)に日本歴史言語学会第1回大会(大阪大学豊中キャンパス)で発表した原稿に大幅に加筆、修正を加えたものである。発表の前後に貴重なコメントをいただいた先生方に感謝します。

類の過去形である。(1)は Ringe (2006: 185)による例証で、強変化動詞 I ~ III 類の過去単数形が、畳音 (reduplication) の付いたアクセントの置かれた *o*-階梯母音を含む語幹形から発達したことが示されている。また、それらの過去複数形は、やはり畳音が先行するアクセントの置かれないゼロ階梯母音を含む語幹 (アクセントは語尾に置かれる) から生じていることも分かる。

(1) post-PIE perfects

PGmc. preterites

ind. sg. stem	default stem		ind. sg. stem	default stem
* <i>b^he-b^hoid-</i>	~ * <i>b^he-b^hid-</i>	‘have split’	* <i>bait-</i>	~ * <i>bit-</i> ‘bit’
* <i>ġe-ġóus-</i>	~ * <i>ġe-ġus-</i>	‘have tasted’	* <i>kaus-</i>	~ * <i>kuz-</i> ‘chose’
* <i>b^he-b^hond^h-</i>	~ * <i>b^he-b^hnd^h-</i>	‘have tied’	* <i>band-</i>	~ * <i>bund-</i> ‘tied’
* <i>ue-uórt-</i>	~ * <i>ue-urt-</i>	‘have turned’	* <i>warþ-</i>	~ * <i>wurd-</i> ‘became’

しかしながら、ゲルマン祖語の強変化動詞 IV, V 類は過去複数形に延長階梯の母音 **ǣ-* (あるいは **ē^l-*) を含む語幹が生じることが知られている。(2)がその具体例である。

(2) Krahe and Meid (1969: II. 104)

4. Reihe:	got.	<i>bairan</i> „tragen“	<i>bar</i> — <i>bērum</i>
	an.	<i>bera</i>	<i>bar</i> — <i>bōrom</i>
	ags.	<i>beran</i>	<i>bær</i> — <i>bæron</i>
	as.	<i>beran</i>	<i>bar</i> — <i>bārun</i>
	ahd.	<i>beran</i>	<i>bar</i> — <i>bārum</i>
	[urg.]	* <i>ber-</i>	* <i>bar-</i> — * <i>bær-</i> or * <i>bē^lr-</i> : T.T.]

-
- 1 Prokosch (1939: 160): “**The Standard View**, if the consensus of opinion expressed by the great majority of historical grammars of the Germanic languages may be thus designated, considers the strong preterit essentially a direct continuant of the IE perfect tense.” ただし第2節で触れるように、Prokosch自身はこれとは異なる説を支持している。
 - 2 Matzel (1970: 173): “Im germ[anischen] [starken; T.T.] Präteritum lebt — formal gesehen — das idg. Perfekt fort.” Jasanoff (1994: 272): “The preterites of the primary verbs in **-ana^l* and **-jana^l* — or “strong” verbs, as they are called — were based on the PIE perfect.”

5. Reihe:	got.	<i>lisan</i> „lesen“	<i>las</i>	—	<i>lēsum</i>
	an.	<i>lesa</i>	<i>las</i>	—	<i>lōsom</i>
	ags.	<i>lesan</i>	<i>læs</i>	—	<i>læson</i>
	as.	<i>lesan</i>	<i>las</i>	—	<i>lāsun</i>
	ahd.	<i>lesan</i>	<i>las</i>	—	<i>lārum</i>
	[urg.	<i>*les-</i>	<i>*las-</i>	—	<i>*læs/z-</i> or <i>*lē^ls/z-</i> : T.T.]

印欧祖語の完了複数形は一般的に、豊音+アクセントの置かれないゼロ階梯母音を含む語根+アクセントの置かれた語尾という形態であると考えられるが、そのような形からゲルマン語の強変化動詞 IV, V 類の過去複数形はどのように発達したのか、説明が必要である。本稿では、この点についてこれまで様々な学者が提案してきた説をまず検討したいと思う。そしてこれまでの学説の問題点を明らかにし、今後の新たな研究動向の可能性について考えてみたいと思う。

尚、ゲルマン語強変化動詞過去形が印欧祖語の完了形を継承するとした場合、語幹母音が延長階梯を示す IV, V 類過去複数形、および VI 類過去形の由来が問題となることに加えて、次のふたつも問題となる。ひとつには、なぜゲルマン語強変化動詞 I~VI 類の過去形には豊音が見られないのか。もうひとつには、ゲルマン語強変化動詞過去形のうち 3 人称複数形の語尾 **-un* < pre-PGmc. **-nt*³ は、印欧祖語完了 3 人称複数形の語尾 **-r(s)* とは異なるものであるが、この **-un* あるいは **-nt* はどこから来たのかという問題が残る。(これらの問題は、既に Prokosch 1939: 162f. で提起されている。) 以下、これらの点も合わせて考察を進めたい。

第 2 節 語根アオリストとの混交説

ゲルマン語強変化動詞の過去形が印欧祖語の完了形のみ由来すると

3 この点については、Watkins および Jasanoff による次の言を参照されたい。Watkins (1969: 43): “Es ist üblich, ein schwundstufiges **-nt* für germ. Prät. und präsentische Perf. 3.Pl. *-un* anzunehmen, z.B. got. *witun* ‘sie wissen’, und diese Rekonstruktion mit der Gleichung as. *dedun* ‘sie taten’: gath. *dadaŋ* zu verankern, indem man **dhe-dh(ə)-nt* als Vorstufe ansetzt.” Jasanoff (1994: 273): “The **-u-* of the plural endings was probably generalized from the 3 pl. in **-un* < **-nt*, itself the replacement of an earlier *r-* ending (cf. Skt. *vāvyrtūr* < **-rs*).” また、Boutkan (1995: 56 and 336) も見よ。

いう説が「標準的見解」と言えるものの、それとは若干異なる説明もこれまでに提案されてきた。その代表例として、「語根アオリスト形 (root aorist) と完了形との混交説」をここでは取り上げる。Hirt (1932)⁴ に加え、Prokosch (1939)⁵ もこの説を提唱している。しかしながら、Prokosch (1939: 164) の「第 IV、第 V 類の長母音形は断固アオリスト形のものである (The long vowel forms of classes IV and V are definitely aorists)」という主張は、今日受け入れられるものではない。印欧語の語根アオリストが当該のゲルマン語強変化動詞過去形態の基となっているという主張をするために、Prokosch はギリシア語の *ἔβην* ‘I went’ を挙げている。しかし、このギリシア語の語根アオリスト形は延長階梯母音を持つ語根アオリストではなく、*e*-階梯母音を持つ通常の語根アオリスト形に過ぎない。即ち、ギリシア語語形に現れる長母音は、祖語の語根に存在した喉音 (laryngeal) **h₂* によってもたらされていることは明らかである。Peters (1980: 313f.) は、印欧祖語での延長階梯母音を持つ語幹形成母音

4 Hirt (1932: 141): “Das starke Präteritum ist wie das lat. Perfekt ein Mischtempus aus dem idg. Perfekt und dem Aorist.”

5 Prokosch (1939: 164):

... the Gmc. strong preterit is not a homogeneous development from one source, but a combination of several types. Go. *gaf*, *gaft*, *gaf* (class V) and the corresponding forms in classes I-IV as well as the reduplicated forms of class VII (*haihait*) are genuine perfects. The plurals *stigum*, *gutum*, *hulpum* show reduced grade of the root, which is common to the perfect plural and the aorist of diphthongal roots, but the endings of these forms and of the WGmc. 2 sg. point clearly to the latter alternative. At best, it might be admitted that the identity of the root syllable in the two forms may have been a contributing cause for the fusion of the perfect and aorist paradigms. The long vowel forms of classes IV and V are definitely aorists. Thus we have in the first five classes syncretistic preterits, representing aorists everywhere in the plural, in WGmc. also in the 2 sg.; the 1 and 3 sg. are perfect forms everywhere, in Gothic and Old Norse also the 2 sg.

The parallel of this combination of paradigms with Latin conditions is obvious. As in Germanic, the functional distinction between perfect and aorist was abandoned and a new type was created, which combined both functions: L. *vēnī* = Gk. *ἔβην* (for **eβηνα*) (aorist, ‘I went’) + *βέβηκα* (perfect ‘I have gone’). But while Germanic combined both types in every preterit of classes I-V, in Latin, any given verb (aside from numerous new formations) used for its ‘perfect’ either the one or the other. An assumed Latin paradigm *pepigī*, *pepigisti* (= *pēgisti*), *pepigit* — *pēgimus*, *pēgistis*, *pēgerunt* would be an approximate analogon to Go. *gaf*, *gaft* (= WGmc. **gāhī*), *gaf* — *gēbum*, *gēbuþ*, *gēbun*. [下線は田中による]

によらざる語根アオリスト (athematic root aorist) の存在 (**ǵnēh₃-t*, **ǵnēh₃-nti*) を提唱したが、この提案は一般に受け入れられていない (Mottausch 2000: 46-47; Tanaka 2011: p.175 fn.271 などを参照)。この点を鑑みれば、ゲルマン語強変化動詞 IV, V 類の過去複数形の語幹に生じる延長階梯母音を印欧祖語の (語幹形成母音によらざる) 語根アオリストに帰す Prokosch の試みは、成り立たない。⁶ また、印欧祖語の *s*-アオリスト (あるいは sigmatic aorist) はその強形に延長階梯母音が生じることが知られている (Gotō forthcoming: p.113 §3.5.4. などを参照) が、ラテン語の完了形とは異なり、ゲルマン語強変化動詞の過去形では *s*-アオリストに遡るものはないということは明らかである (Mottausch 2000: p.46 (3a) を参照)。

このように、強変化動詞 IV, V の過去複数形の延長階梯母音の起源について簡明な説明を与えることができないものの、この語根アオリスト形との混交説は、近年においても研究者によって時折提唱される理論となっている。例えば、Bammesberger (1986: 49) はその可能性について言及しており、また Mottausch (2000) はこの考えに依拠して自説を展開している。Bammesberger も Mottausch も、元々畳音を持たなかった語根アオリスト形が完了形と混交することで、完了形に元々付随していた畳音が消失したのではないかと述べている。⁷ この理論は第 1 節の 2 番目に挙げた問題、即ち「ゲルマン語強変化動詞過去形は第 VII 類動詞を除い

6 Prokosch (1939: 191): “The ‘regular’ strong verbs of class[es] IV and V have Gmc. *ǣ* [= *ē*: T.T.] in the plural. These are aorist forms, but the preterit presents are perfects pure and simple, without aorist admixture, and have therefore in the plural the regular ablaut grade of the perfect, namely, zero grade: *skulum* as against *stēlum*, *munum* as against *nēmum*.”

7 Bammesberger (1986: 49): “Ferner sollte man berücksichtigen, daß möglicherweise dem athematischen Wurzelaoorist beim Aufbau des germanischen Präteritalsystems eine gewisse Rolle zukommt. Wenn reduplizierte Perfektformen und nichtreduplizierte Aoristformen durch Synkretismus in einem präterital Paradigma vereinigt wurden, dann konnten durchaus die nichtreduplizierten verallgemeinert werden.” Mottausch (2000: 52): “Der Untergang der allgemeinen Reduplikation, d.h. ihre Unterdrückung, wo dies sprachökonomisch vertretbar war, wird oftmals, und meiner Meinung nach zu Recht, im Zusammenfließen des Perfekts mit dem (Wurzel-) Aorist gesehen, dessen Stamm im Nicht-Sing. mit dem des Perfekt identisch war. Nachdem sich beide Tempora (wie z.B. auch im Latein) semantisch angenähert hatten und zu reinen Vergangenheitsbezeichnung geworden waren, war dies naheliegend.”

て畳音を示さないのは何故か」という問いに一定の回答を与えていると思われる。この点は、この理論の長所となっていると言えるかもしれない。

それに対して、第1節で述べた3つ目の問題、即ち「ゲルマン語強変化動詞過去3人称複数形語尾 **-nt* > **-un* はどこから来たのか」という点については、この理論からは簡明な説明を得られないように思われる。なぜならば、語根アオリスト3人称複数形の語尾は、祖語ではアクセントのある *e*-階梯母音を伴う **-ént* であり、見かけ上ゼロ階梯である **-nt* とは一致しないからである。⁸ 他方、近年 Mottausch (2000: 52) はこの問題に関連して、ゲルマン語強変化過去複数形の語尾の由来をめぐって次のような論を展開している。即ち、アオリストとの混交によって本来の完了複数語尾は放棄され、アオリスト語尾に影響され、更にはより頻繁に使われる現在語尾に模して実現した **-um*, *-up/d*, *-un* に替わったということである。⁹ ゲルマン語で最も頻繁に生じる現在形は語幹形成母音による現在形 (thematic present) であり、その3人称複数語尾は **-onti* > **-anp/d* である。語根アオリスト3人称複数語尾 **-ént* > **-in* が、**-onti* > **-anp/d* を模していかにして **-nt* > **-un* となり得たのか不明な上、そもそも過去形語尾がなぜ現在形語尾を模す必要があったのか、疑問が残る。

本節では語根アオリスト形と完了形の混交説の長所と短所を見たが、最後にひとつの問いを発しておく。ゲルマン祖語に至るまでの歴史で、強変化過去の形態的体系が形成される際、完了形と混交できる可能性のあった範疇はアオリスト形に限られたのであろうかという疑問である。この点については、第4節で再び取り上げたい。

-
- 8 Schumacher (1998: 181) による批判を参照のこと。“Zu betonen ist jedenfalls, dass urgerm. **-un* sich nicht aus der 3Pl des athematischen Wurzelaorists herleiten lässt, denn diese lautete uridg. **-ént* und nicht **-nt* (pace Prokosch 1939: 164).” またこの説に対する他の観点からの批判として、Schumacher (2005: p.593 fn.5) と Mailhammer (2007: 39f.) を参照されたい。
- 9 Mottausch (2000: 52): “Naheliegend war auch die Aufgabe der alten Perfekt-Pluralendungen, urg. etwa **-me*, *-e*, *-ur* (vgl. das Ail) zugunsten vom Aorist her beeinflusste (und in Anlehnung an die geläufigeren Präsensendungen durchgeführte) **-um*, *-up/d*, *-un*.”

第3節 完了形のみからの発達とする説

ゲルマン語強変化動詞の過去形は印欧祖語完了形のみから発達したという立場を取る場合、その仮定に伴ってどのような補助的説明が必要となるか、この節では検討してみたい。

3.1. 畳音の自発的消失説

ゲルマン語強変化動詞 I～VI 類の過去形ではなぜ畳音が消失したかという問題に対して、完了形のみからの発達説を採る立場からは、アオリスト形との混交などの外的な影響にはよらず、自ずから消失したという見解を取ることになる。このような見解を本稿では「畳音の自発的消失説 (the theory of the spontaneous loss of reduplication)」と呼びたいと思う。畳音の自発的消失に関して、Prokosch (1939: 161f.) は「重音脱落 (haplology)」というメカニズムに言及している。¹⁰ Ringe (2006: 185) が「単に脱落した (simply dropped)」と述べる一方、¹¹ Jasanoff (2007: 243) では畳音脱落の原因として、「前つづりが重なったこと (multiple preverbs)」、「速い発話の結果 (an effect of fast speech)」などを示唆している。^{12, 13}

3.2. 縮約説

ゲルマン語派が印欧祖語から分離した後、ゲルマン祖語が形成される

10 Prokosch (1939: 161f.): “The lack of reduplication in the first six classes is explained as ‘haplology’ (fusion of two similar syllables into one, as in ‘interpretive’ for ‘interpretative’), which may have started with the type *sētum* < **sēzd-men*, *sētum*.” ゲルマン語強変化過去形で重音脱落 (haplology) によって畳音が脱落したとする論考として、例えば Loewe (1911: 126ff.; 1913: 141ff.) を挙げることができる。

11 Ringe (2006: 185): “the reduplication syllable has simply been dropped.”

12 Jasanoff (2007: 243): “Sometime before the breakup of Proto-Germanic, the majority of strong preterites gave up their reduplication. Like all such changes, the process must have been gradual and accompanied by considerable sociolinguistic variation. The loss of reduplication may have begun in forms with multiple preverbs, as in Old Irish; or it may simply have been an effect of fast speech. But wherever and however it began, the passage of time would have favored the dereduplicated variants, which tended to become more frequent and, other things being equal, to replace the longer forms. The qualification of “other things being equal,” however, is important. In verbs where the vocalism of the present contrasted with that of the preterite — in effect, in the standard six classes of strong verbs — the loss of reduplication was complete.”

に至るまでに、完了形の豊音が自発的に消失して強変化動詞の過去形が形成されることになったという構想のもと、強変化動詞 IV, V 類の過去複数語幹になぜ長母音が生じたのかについての説明のひとつに、「縮約説」と呼んでよいものがある。この「縮約説」は、Michels や Streitberg の論考に端を発し、¹⁴ Hirt (1921: 44-45; 1932: 146) も取り上げているが、¹⁵ その最も洗練した形を述べれば、完了形の豊音が一般的に消失する以前に、後に強変化 V 類過去複数形となる完了複数形において、豊音とゼロ階梯の語幹が縮約したということになる。強変化 V 類動詞 *sitjan「座る」を例に取るならば、元々の完了複数形 *se-sd- あるいは *se-zd- が縮約 (contraction) によって *sēd- となったという説である。この考えは、ラテン語やヴェーダ語に対応する形の完了複数形が存在することから、一見説得力あるように見える。またこの仮説は、Cowgill (1960: 489) によっても採用されている。¹⁶

しかしながら、この仮説は早くも Prokosch (1939: 161-163) によって論駁されている。¹⁷ その要点を述べれば、次のようになる。ラテン語の完了語幹 *sēd-* 及びヴェーダ語の完了複数語幹 *sed-* は、音法則によって豊音とゼロ階梯語幹との縮約による発達と説明できるのに対し、ゲルマン語強変化 V 類過去複数形の **sāet-* はそうはならない。音法則によれば、元々

13 これらに加え、Schumacher (2005: 603-604) は近年、彼が提唱する印欧祖語における「*bigētun-* 規則 (*bigētun-* Regel)」に基づいて、印欧祖語の段階で豊音を放棄していた強変化 V 類過去複数形が出发点となって、豊音の脱落 (dereduplication) が前ゲルマン祖語の時代に強変化 I-VI 類動詞全般に浸透したとする説を提示している。しかしながら、印欧祖語における「*bigētun-* 規則」の存在については私は懐疑的である。この規則の設定に対する本稿における批判は以下の脚注33と49に挙げた短いコメントに留め、詳細については稿を改めて論じたい。これまでに Schumacher (2005) の「*bigētun-* 規則」に対し批判的言及をしたものとして、Mailhammer (2007: 73-74) と Jasanoff (2010: 3-4) が挙げられる。

14 Streitberg (1896: 81ff.) の提案については、脚注17に挙げた Prokosch (1939: 161) による要約および引用を参照されたい。

15 Hirt (1932: 146): “Andere Verben zeigen im Sing. keine Doppelung, dagegen im Plural ein ē, in dem die Doppelung stecken dürfte. Hierher gehören die Verben der sogenannten 4. und 5. Klasse ...”

16 Cowgill (1960: 489): “preterit presents were already unreduplicated in pre-Germanic at the time when reduplicated perfect plurals of the type *Te-TK-* were replaced by stems of the type *TēK-*.”

の完了複数形 **se-sd-* あるいは **se-zd-* は、ゲルマン語では **sest-* > **sist-* としかならない。Mottausch (2000: 45) も挙げている例、即ち PIE **ni-zd-* > PGmc. **nist-* ‘nest’ の事例からもこのことは明らかである。¹⁸ 強変化動詞 V 類過去複数形の場合に限って、母音 + **s* + 歯音 (**t/d*) の環境で、**s* が脱落して先行母音が代償延長を生じるという理由が明らかにならない

17 Prokosch (1939: 161-163):

(p.161) But classes IV and V constitute a well-defined type with root vowel IE *ē*: Go. *sētum*, etc. In order to reconcile this with the traditional view that every Gmc. preterite must necessarily be an IE perfect, Michels and Streitberg developed this theory: IE *ghé-ghēbh-men*, *ghé-ghēbh-nt* (with accented reduplication) became **ghéghbhmm*, *ghéghbhnt* in accordance with Streitberg’s Dehstufen theory (similar to Vedic forms with long vowel in the reduplication), and through some consonant assimilation or simplification this resulted in Go. *gēbum*, *gēbun*. Streitberg considers the connection with the IE perfect an inescapable postulate of method: ‘Der Ursprung des “schwundstufigen” *ē* ist im schwachen Perfektstamm (perf. plur. act. usw.) zu suchen. Alle Erklärungsversuche, die ihn nicht zum Ausgang nehmen, müssen a priori aus methodischen Gründen als verfehlt betrachtet werden. Denn es kann kein Zufall sein, dass nur der Plural des Perfekts, nicht der vollstufige Singular (aber auch nicht das schwundstufige part. perf.) den Vokal *ē* kennt.’ A weighty parallel is L. *sēdimus*; as in *nīdus* < **ni-zd-os*, this may contain compensatory lengthening, going back, phonologically, to **se-zd-amos*, Sk. *sēdimá*.

...

(pp.162-163) The Streitberg-Michels Theory is evidently a *petitio principii*. To explain *ē* in *gēbum*, it is from the outset taken for granted, for inadequate reasons of method, that the form *must* be a perfect. Then, the equally unproven Dehnstufentheorie is applied to the accented (?) reduplication, and the single consonant is ascribed to simplification of the heavy consonant group. The latter point is acceptable enough, in spite of the lack of phonological parallels, but the two unproven premises are not. The parallel of L. *sēdimus* and Sk. *sēdimá* is deceptive, since the two forms are by no means identical ... Sk. *saśáda* < **sesóda*, pl. *sēdimá* < **sezdimá*, **sezdamé*, is a regular IE perfect type, since **sezd-* had to become **sēd-* by phonetic law ... L. *sēdimus*, taken alone, could go back to **sezdamos* (see above), but this would isolate the form entirely in the Latin verbal system, separating it from obviously parallel forms like *lēgibus*, *vēnimus*. Moreover, the Germanic forms do not lend themselves to such an explanation. **se-zd-mén* would have given Go. **sistum* (cf. OHG *nest*). The Sk. type *saśáda* — *sēdimá* cannot be considered Indo-European. Its resemblance to Go. *sat* — *sētum* is accidental. It developed in Sanskrit, starting with forms where phonetic law required *ē*, such as *yayāma* — *yēmimá* < **ya-im-*, like *sēd-* < **sezd-*. From this type it spread to other verbs, such as Ved. *paptimá* — Sk. *pētīmá*, *tēnimá*, etc.

限り、この「縮約説」は信憑性が乏しいと言える。¹⁹

尚、Ringe (2006: 186-187) は、依然この縮約説に依拠する説明を試み

- 18 Mottausch (2000: 45): “Doch hätte, wie schon lange bemerkt, *-zd-* im Germ. nicht *-ŷt-* sondern *-ŷst-* (vgl. **nizdos > Nestl*) ergeben sollen.” 敷衍すれば、PIE **ni-sd-ó-* (**ni-* ‘down’ + **sed-* ‘sit’) > Ved. *nīdā-* ‘resting-place, nest’, Lat. *nīdus* ‘nest’, PGmc. **nist-a-* (> Go. *nists*, OE *nest*) ‘nest’ となる (Sihler 1995: 213 を参照)。
- 19 これに関連して、Klingenschmitt (1982: 129-131) は「音節開始部の *s* の異化的影響のもと、有声子音の前位置の *z* が消失し、先行する短母音の代償延長が生じた」という音変化を示唆している (p.129: “Hier hat offensichtlich unter dem dissimilatorischen Einfluß des die Silbe anlautenden *s* ... ein Schwund von *z* vor stimmhaftem Konsonant mit Ersatzdehnung des vorhergehenden kurzen Vokals stattgefunden”) が、「前述箇所て記述した音法則が既に印欧祖語で作用していたのか、インド・イラン語派およびバルト・スラブ語派に限られるのかは、はっきりとは判定できない」(p.130: “Die Frage, ob das im vorausgehenden beschriebene Lautgesetz bereits grundsprachlich gewirkt hat oder nur auf das Indoiranische und Baltoslawische beschränkt ist, kann nicht sicher entschieden werden”) としている (i.e. Klingenschmitt’s law **sVz > *sV̄ø*; Gotō forthcoming: p.100 fn.232)。だが、この音法則は印欧祖語のものではなく、インド・イラン語派やバルト・スラブ語派に限られたものと解釈してよいと思われる。例えばギリシア語では、当該音法則が作用したことを示す疑いの余地のない例は存在しない。Gk. *ἵζω* ‘I take a seat’ < **si-sd-oh₂* について、Klingenschmitt (1982: 130f.) 自身はこの動詞形を、**sti-sth₂-a/o-* あるいは **sti-sth₂-e/o-* ‘stand’ (> Gk. *ἵσταναι* or Att. *ἵσταναι*) を模したアナロジーによる短母音 *-i-* の復活かもしれないとしている (“In gr. *ἵζε/o-* ‘sich setzen; sich setzen lassen’ ... könnte notfalls eine analogische Restitution der ursprünglichen Form (etwa nach **sti-sth₂-a/o-* bzw. **sti-sth₂-e/o-*) vorliegen (lat. *sīdō* und neuumbr. *andersistu* sind doppeldeutig.)”。) しかしながら、Klingenschmitt が想定する pre-Gk. **sīdō* (> **hīdō*) の反映形が全く記録されていない点、ギリシア語においても Klingenschmitt の法則が適用されたとする見解は疑う余地がある。更には、女性名詞 *ἰσχύς* ‘strength’ は印欧祖語名詞語幹 **si-sg^h-u-* から派生されたと考えられる (NIL p.601 s.v. **seg^h-* ‘überwältigen, in den Griff bekommen’ 参照) が、ここでも Klingenschmitt の法則が適用された痕跡が見られない。ゲルマン語においても、Klingenschmitt の法則が適用されたとしか解釈できないような例は見つからないように思われる。(ちなみに、Mayrhofer 1986, 2004 も「Klingenschmitt の法則」を印欧祖語の音法則としては採用していないことを、併せて注意しておきたい。) Klingenschmitt (1982) の関連する議論に対する近年の批判的論評として、Schumacher (2005: p.602 fn.25) を参照されたい。これに加えて、ヴェーダ語 *sēdimá* < **sezdamé* のような型の縮約がゲルマン語強変化動詞 V 類過去複数形の生成過程に関与していると仮定した場合、どのような未解決の問題が残るか更に考察した近年の論考として、Laker (2001) を挙げるができる。

ている。²⁰ 印欧祖語の完了複数形 **se-sd-* が、グリムの法則 (Grimm's Law) 等の音変化で **sest-* となった後、何らかのアナロジーによって **sēt-* に改変されたという想定だが、具体的にどのようなアナロジーによる形態変化であるか明らかにされておらず、十分な説得力がない。

3.3. *-æ- の V 類から IV 類への拡張説

ゲルマン語強変化動詞 IV, V 類の過去複数語幹に生じる長母音 *-æ- の由来について、近年最も受け入れられている説として、当該長母音は V 類動詞から IV 類動詞に広がったというものが挙げられる。この見解を採用している近年の論考には、Ramat (1981: 163), Bammesberger (1986: 55-56), Jasanoff (1994: 273), Mottausch (2000: 45 & 54), Schumacher (2005: p.598 §3.2.3; p.601 fn.22; p.603 §5),²¹ Ringe (2006: 227-228), Mailhammer (2007: p.65 §3.1.6 and pp.67f. §3.1.8) などがある。²² この「V 類から IV 類への拡張説」が研究者の間に浸透するきっかけとなったのは、Kuryłowicz (1956, 1968) による提案を検討し、当該の「拡張説」にどのような問題があるか考えてみたい。Kuryłowicz は、VI 類の過去複数形の語幹母音が最初に長化され、その結果として生じた VI 類動詞の長い語幹母音が、V 類動詞過去複数形へと拡張され、それが更に IV 類動詞過去複数形に伝播したという図式を提案している。

Kuryłowicz (1956: 309-311) は強変化 IV, V, VI 類動詞を取り上げ、(3)

20 Ringe (2006: 186f.): “In any case, at least some analogical remodeling must be posited, ...”

21 Schumacher (2005) による考察へのコメントとして、以下の脚注33を見られたい。

22 Ramat (1981: 163): “Im Prät. Pl. hätten wir eigentlich nach dem Schema der ersten drei Reihen ***numum* und ***burum* zu erwarten, wie man es tatsächlich bei den entsprechenden Präteritopräsentia der IV. Reihe findet: *skal/skulum, man/munum*. Der Prät. Pl. auf *-ē-* ist ... in Analogie zur V. Reihe gebildet.” Jasanoff (1994: 273): “The **-ē-* of the preterite plural in class IV was borrowed from class V, replacing **-u-* (**burum* < **(bhe)bhj-mé*.” Mailhammer (2007: p.65 §3.1.6): “it is only the preterit-presents of this class [= class IV: T.T.] that display the regular zero grade in the present plural stem ..., as the remaining verbs have taken over the lengthened grade from class V ...” 同書 pp.67-68 §3.1.8: “There is virtually no disagreement that the lengthened grade in class IV is a secondary formation after the model of class V ... However, the origin of the lengthened grade in class V is still not sufficiently explained.”

に挙げた初期ゲルマン祖語の状態から (4) に挙げたゴート語での状態に発達する間に、どのような変化が存在したのかという点について考察している。²³

23 Kuryłowicz (1956: 309-311):

Le prétérit fort, correspondant au parfait indo-européen, était caractérisé au singulier par le degré *o* (*gab*, *bar*), au pluriel, par le degré zéro (*geb-*, *bur-*), mais les racines appartenant à la classes VI n'étaient plus ... sujettes à l'apophonie vocalique. Détail important à retenir: dans la classe IV l'ancienne apophonie *o* : zéro (en face du rapport historique *ō* : *ē*) est encore attestée par les prétérito-présents, ainsi got. *man* „je crois“, plur. *munum*, *skal* „je dois“, plur. *skulum*. Le degré zéro s'accorde avec le tableau présenté par les classes I-III (**bitum*, **buđum*, **bundum*). De plus, le participe passé des classes IV, V garde l'ancien degré zéro, types **burana-*, **gebana-* (cf. **bitana-*, **buđana-*, **bundana-*). L'ancien paradigme **skab*, **skabun* est étayé par got. *mag*, *magun*.

...

Si tel est le cas, le rapport *présent* : *prétérit* résumé par le schéma ci-dessus a dû subir une transformation importante à l'époque de l'abrègement *ĒRT* > *ĒRT*. Opposées à *faran*, les formes **farme*^ε, **farpe*^ε ont été appréciées comme contenant un vocalisme long latent, d'où 1) l'introduction de *ō* dans les formes à syllabe non-entravée, ainsi *fōrun* à la place de **farun*; 2) l'introduction de *ō* à la place de *a* dans les racines verbales à finale consonantique (occlusive ou *s*) comme **skab* : **skōba*, **skōfta*, **skōbe*, **skōbme*^ε, **skōfpe*^ε, [**skōbun*. Dans le reste du paradigme de *fōrun* la longue a été introduite au fur et à mesure que les conditions le rendaient possible. C'est ainsi que le remplacement de **farme*^ε, **farpe*^ε par *f-um*, *f-up* a été accompagné de l'allongement simultané de la voyelle radicale.

... le degré long dans le type **geban* n'a pu se développer qu'au pluriel du prétérit. Le rapport **skaban* : **skōbum*, **skōbuþ*, **skōbun* a engendré **geban* : **gēbum*, **gēbuþ*, **gēbun*, tandis que la quantité vocalique du singulier (**gab*, **gast*, **gab*), qui différerait de **geban* par le *timbre*, est restée intacte. ...

Enfin, sous l'influence conjointe des types **faran* : **fōrum*, **fōruþ*, **fōrun*, et **geban* : **gēbum*, **gēbuþ*, **gēbun*, on a formé **bērum*, **bēruþ*, **bērun* remplaçant l'ancien pluriel **burum*, **buruþ*, **burun*. Ici encore, à cause de la différence du timbre, le singulier a maintenu l'ancienne quantité brève (**bar*, **bart*, **bar* en face de **beran*).

Il y a donc eu une différence chronologique entre **gēbum*, **gēbuþ*, **gēbun* et **bērum*, **bēruþ*, **bērun*: dans le premier cas il a suffi que l'allongement se superpose au timbre hérité de **gēbum*, **gēbuþ*, **gēbun*; dans **burum* etc, le changement de la forme héritée a été quantitatif en même temps que qualitatif (**bērum* à la place de **burum*). [下線は田中による]

(3) sometime before the PGmc. period

	VI		V	IV	
present (infinitive):	faran	skaban	geban	beran	
preterite (primitive):	sg. 1	fara	skaba	gaba	bara
	2	farta	skafta	gafta	barta
	3	fare	skabe	gabe	bare
	pl. 1	far ^m e ^x	skab ^m e ^x	geb ^m e ^x	bur ^m e ^x
	2	far ^þ e ^x	skaf ^þ e ^x	gef ^þ e ^x	bur ^þ e ^x
	3	farun	skabun	gebun	burun

(4) Gothic

present (infinitive)	faran	skaban	giban	bairan	
preterite	3 sg.	for	skof	gaf	bar
	3 pl.	forun	skobun	gebun	berun

(3) の初期ゲルマン祖語の段階では、VI 類動詞 **faran* ‘fare, go’ 及び **skaban* ‘shave, shear’ の活用では母音交替を示さず、常に語幹母音 **a* を保っている。過去単数および過去複数形双方で語幹母音が短い **a* であったと考える根拠として、Kuryłowicz は過去現在動詞 **mag-* が単数形でも複数形でも、短い **a* を語幹母音として保っていることを挙げている。その一方、V 類および IV 類動詞の活用では母音交替がある。V 類動詞 **geban* ‘give’ では、過去単数語幹に印欧祖語の完了単数語幹の *o-* 階梯母音を反映した母音 **a* を示し、過去複数語幹では印欧祖語の完了複数語幹のゼロ階梯母音を反映した母音 **e* を示している。阻害音 (obstruent) が連続する環境では、元々のゼロ階梯母音がゲルマン祖語では **e* として実現するという点は、過去分詞 **gebana-* においても同様である。²⁴ IV 類動詞 **beran* ‘bear’ では、過去単数語幹に印欧祖語の完了単数語幹の *o-* 階

24 Kuryłowicz (1968: 211) によれば、このように阻害音間のゼロ階梯母音がゲルマン祖語で **e* として実現するのは形態的な過程であるという (Der Ersatz von Null durch kurzen Vollvokal ist eine morphologische Tatsache)。換言すれば、印欧祖語における第2シュワー (*schwa indogermanicum secundum*) は音法則によってではなく形態的発達によって、この環境ではゲルマン祖語の **e* となったということである。この問題についての最近の論考として、Mailhammer (2007: 68-72) も参照されたい。

梯母音を反映した母音 **a* を示し、過去複数語幹では印欧祖語の完了複数語幹のゼロ階梯母音を反映して、**-ur-* という連鎖を示している。この古い段階での状況、即ち過去複数形に母音 **u* + 共鳴音の連鎖を示す形は、対応する IV 類の過去現在動詞の複数形 **mun-um* や **skul-um* に保たれている。

この (3) の状態が成立した後に、長母音 + 共鳴音 + 子音の環境で長母音が短化する音変化 ($\acute{E}RT > \grave{E}RT$)、即ち オストホフの法則 (Osthoff's Law) が適用されると Kuryłowicz は考える。その結果、不定詞の **far-an* はこの音変化と無縁の環境にあるものの、子音で始まる語尾を持つ 1 人称複数過去形 **farme^x* や 2 人称複数形 **farpe^x* はこの音変化が適用したと考えられる環境にある。²⁵ このことから、これらの語形の語幹は「潜在的な長母音 (un vocalisme long latent)」を持つと解釈されたと Kuryłowicz は主張する。即ちこれは、オストホフの法則の逆の現象が起り、**farme^x* と **farpe^x* は長母音を得て **färme^x* と **färpe^x* となり、その後ゲルマン語母音推移によって **förmē^x* と **förpe^x* となったと主張していると思われる。このように 1 人称および 2 人称複数形の語幹母音が長化したため、当該母音が元々開音節の環境にあった (即ちオストホフの法則が適用されない環境にあった) 3 人称複数形 **farun* も同様に語幹母音の長化を受け、更には動詞語根末が子音 (閉鎖音か **s*) である場合も語幹母音の長化を受けた (つまり元々オストホフの法則適用の環境とは無縁であった **skaban* の過去形もこの長化を受けた) と Kuryłowicz は述べている。そしてその後、**faran* の過去単数語幹にも長母音が拡張したということである。

このようにまず VI 類動詞過去形の語幹母音が長化を受け、次にその長い語幹母音が V 類動詞の過去複数形へと拡張したと Kuryłowicz は考えている。そこで用いられたアナロジーの比例式 (analogical proportion) は、「VI 類動詞の現在語幹 **skab-*: 過去複数語幹 **skōb-* = V 類動詞の現在語幹 **geb-*: 過去複数語幹 X」であり、ここから $X = *gēb-$ が得られる。過去単数語幹は元々の **gab-* が保たれたのだが、なぜ過去単数形ではアナロジーによる形態変化が生じなかったのかという点について、その語幹母音 **a* が現在語幹の母音 **e* と音色において異なっていたからだと

25 ゲルマン祖語におけるオストホフの法則の適用については、Jasanoff (1994: 259 and 274) や Ringe (2006: 75-78) も参照されたい。

Kuryłowicz は述べている。この後に、VI 類動詞および V 類動詞双方の活用パターンに影響されて、IV 類動詞は過去複数語幹として長母音を含む *bēr- を得たということである。

これが Kuryłowicz (1956: 309-311) の説明のあらまじだが、この説明図式は全般的に大いに疑わしく思われる。まずは、(3) に表されている初期ゲルマン語の状態では VI 類動詞は現在語幹のみならず、過去単数および複数語幹にも短母音 *a を含んでいたという考えには賛同できない。この仮定の根拠として、Kuryłowicz は「過去現在動詞は純粹に完了形の形態を継承している」(脚注6に挙げた Prokosch 1939: 191 の言を参照) という暗黙の了解に基づき、過去現在動詞 *mag- が単数・複数形双方で語幹に短母音 *a を示すという事実を挙げている。しかしながら、過去現在動詞 *mag- については、ゲルマン語以外の印欧語に完了形の痕跡が全く見られず、印欧語の完了形に由来するという考えは疑わしい(詳細については Tanaka 2011: 199-208 に譲る; 加えて Schumacher 2005: p.596 fn.15 も参照されたい)。

これ以上に大きな問題となるのは、脚注23の引用の下線を施した部分にある考えである。即ち、VI 類動詞 1 人称及び 2 人称複数過去形 *farmē^x と *farþē^x が「潜在的な長母音 (un vocalisme long latent) を持つと解釈された」という仮定である。潜在的な長母音を持つがゆえに元々の短母音が長化されたという主張が正しいとするならば、オストホフの法則による母音短化を受ける環境にある母音は長化される、即ちオストホフの法則によって短化された母音も長化されるということになるであろう。が、これは事実と反する。このようなことが成り立つならば、語根の形状そのものがオストホフの法則による母音短化の条件に適合する強変化 I ~ III 類動詞の現在形、過去単数形 (4.4 節の (8) を参照) は、すべて語幹に長母音を示したことであろう。また、語幹が共鳴音で終わる強変化 IV 類動詞も過去 1 人称および 2 人称複数形で語幹母音が長化され、それが VI 類動詞の場合と同様、過去形全体に広がったことであろう。

更には、語幹母音の長化とゲルマン語母音推移との間の相対年代 (relative chronology) に関連してこの図式には様々な問題があるように思われるが、これはこの後に触れる van Coetsem (1972) の提案を用いれば幾分改善できるかもしれない。

また、IV 類及び V 類動詞の過去単数形が元々の短母音 *a を保ち、長

化を受けなかった理由を、Kuryłowicz は現在語幹の母音 *e との間に音色の違いがあったからだとして述べているが、現在語幹の母音との差異を得ることが過去語幹の形態を定める際に重要な役割を果たしたことを、説明図式の基本原理として明確に採用する必要があるのではないだろうか。この点は、以下に Kuryłowicz (1968) 及び Matzel (1970) の論考を検討する際に再び触れることにする。

Kuryłowicz は *L'apophonie* (1956) 出版の12年後となる1968年に、当該の図式の改訂版とも言える論を発表している。²⁶ そこではまず、VI 類動詞過去語幹が元々は短母音 *a を持っていたのであるが、それが現在語幹と同じ母音であることを解消するために *ō に代えられたと主張している。現在語幹と異なる母音を得るためにという点は良いとしても、なぜ、あるいはどのようなメカニズムで *ō に替わったのか、不明である。

26 Kuryłowicz (1968: p.290 §367): “Die Einführung des *ō* in den Pl. Prät. erklärt sich durch die ursprüngliche Identität des Vokals Pl. Prät. und des Präs. Daher wird das Verhältnis **farām* : **farum* durch **farām* : **fōrum* ersetzt.” 同書 pp.290f. §§368-369:

In der 5. Klasse war die Nullstufe mit der Vollstufe identisch, ... Dies stimmt zu der schon ursprachlichen Entwicklung der Schwundstufe in leichten Wurzeln auf Konsonant ... Nach dem Muster got. *stigans* : *stigum* = *taihans* : *taūhum* = *bundans* : *bundum* würde man daher auch *gibans* : **gibum* erwarten. Die Identität des Vokals von **gibum* (germ. **gēbum*) mit der Vollstufe des Präs. wird zur Ursache der Differenzierung:

germ. *sakam* : *sōkum* = *gebam* : *gēbum*.

Daß in der Identität der Vokalismen das eigentliche Motiv für die Einführung des Langvokals in *gēbum* zu suchen ist, erhellt aus der Beibehaltung des Vokals *a* im Sg. Prät. (germ. *gab*), eben weil er in der Klangfarbe vom Vokal des Präs. abwich.

Also sind (got.) *sokum* und *gebum* durch die Tendenz zu erklären, die Formen des Pl. des Präs. und Prät. auseinanderzuhalten. ...

Nur in der 4. Klasse ist der langstufige Pl. Prät. (*berum*) kein direktes Ergebnis der genannten Tendenz. Die Dehnung $\bar{a} > \bar{o}$ vor Geräuschlaut und Sonant sowie $\bar{e} > \bar{ē}$ vor Geräuschlaut drückt *e* > Null vor Sonant (*uR*) zu einem sekundären Allomorph herab. Daher wird das zu erwartende **burum* durch **bērum* ersetzt. Hier konnte bloß das Muster der 5. Klasse den Ausschlag gegeben haben:

germ. *gebam* : *gēbum* = *beram* : *bērum*.

Aber die alte Nullstufe ist noch in den Prät.-Präsentia bezeugt, vgl. got. *man* : *ga-munup*, *ga-muneip* usw.; *skal* : *skulum*, *skulup*, *skulun*, *skuleip* usw. Dies zeugt von dem späten Ersatz von **burum* durch **bērum*, der als die letzte Auswirkung der Dehnung in *sōk*, *fōr* anzusehen ist. ... [下線は田中による]

現在語幹の母音と異なる母音は **ō* ばかりではないため、例えばどのようなアナロジーの比例式によって **a* が **ō* に替わったのかという点が明らかにならない限り、この説明は有効にはならないであろう。²⁷

次に VI 類過去語幹の長母音が V 類過去複数語幹に影響を与える点についてであるが、Kuryłowicz (1968: 290-291) の説明は12年前のものと同基本的に同じである。「VI 類動詞の現在語幹 **sak-* ‘argue, dispute’: 過去複数語幹 **sōk-* = V 類動詞の現在語幹 **geb-*: 過去複数語幹 X」というアナロジーの比例式が用いられ、X = **gēb-* が得られることになる。(この比例式では、VI 類過去複数形が母音推移以前の **sāk-* ともし設定できるならば、より説得力があるように思うが、これは本質的な問題ではないだろう。この点は以下で扱う van Coetsem の提案によって改善できそうである。) V 類動詞の過去複数形のみアナロジーによる形態変化があり、過去単数形に変化が生じないのは、12年前の論考と同様、過去複数語幹の元々の母音 **e* は現在語幹の母音と同じであり、過去単数語幹の母音 **a* は現在語幹の母音 **e* とは異なっていたからだという主張になっている。このように、VI 類動詞の過去形、及び V 類動詞の過去複数形における語幹母音の長化について、Kuryłowicz (1968) は「現在複数形と過去複数形を互いに区別する傾向 (die Tendenz, die Formen des Pl[urals] des Präs[ens] und Prät[eritums] auseinanderzuhalten)」というメカニズムから説明を試みている。しかしながら、IV 類動詞が過去複数語幹に長母音を得る際には、このメカニズムの直接の結果としてそうなったのではないという奇妙な主張をしている。脚注26の引用の中の下線部の箇所がそうであるが、「VI 類動詞の過去形で *ā* > *ō* の長化があり、V 類動詞の過去複数形で *ē* > *ē* の長化があったために、IV 類動詞のゼロ階梯母音の過去複数形は二次的異形態に貶められた。従って V 類とのアナロジーにより *ē* > *ē* の長化が生じた。」と論じている。これは換言すれば、「VI 類動詞および V 類動詞の過去 (複数) 形に長化が生じたのだから、IV 類動詞の過去複数

27 VI 類動詞ではなぜ現在形 **a* と同じ音色の **ā* とならなかったかも疑問が残る (pre-PGmc. **ā* > PGmc. **ō* の母音推移以前にこの変化が生じたと仮定する積極的根拠があるだろうか)。更には、VI 類とのアナロジーによって V 類過去複数形に長母音が生じたのであれば、VI 類と同じ **ō* を得る方が自然ではなかったかという疑問も残る (Mailhammer 2007: p.74 §3.1.8.1 を参照: しかしながら、以下本文の van Coetsem 1972 の論も見よ)。

形にも長化が生じなければならなかった」と規定しているだけとも言え、説得力がない。以下で検討する Matzel (1970: 178) が提案するように、IV 類動詞の過去複数語幹が長母音を示す事実もやはり、現在語幹との差異を得るためにという点から説明されるべきだと思われる。

Kuryłowicz (1956, 1968) の論考は様々な問題を残しているが、最大の問題点となるのは、語幹の長母音が広まるプロセスの出発点であると仮定する強変化 VI 類過去語幹に、どのようなメカニズムで長母音 $*\bar{a}$ あるいは $*\bar{o}$ が生じたか、説得力のある説明が与えられていない点にある。初めに VI 類過去形語幹に長母音が獲得され、それが V 類へ、そして IV 類へ拡張したと Kuryłowicz は主張するのだが、まず VI 類過去語幹に最初に長母音を得られたと想定するための独立的証拠が欠如している。独立的な信頼できる証拠なしに、まずは VI 類過去語幹に長母音が生じたという仮定から出発する議論は、疑問の余地を大いに残す説ではないだろうか。即ち、ゲルマン語強変化動詞の過去形は印欧祖語完了形の形態を受け継いだと仮定した場合、その由来に最も多くの謎を残すのが、過去形の語幹に一貫して長母音を示す VI 類動詞だと言える。そのような形態的発達過程が明らかにならない VI 類過去形が最初にその活用パターンを確立したのであると想定する図式は、その想定そのものを支持する積極的根拠が無く、信憑性に乏しいと言わざるを得ない。

更にもうひとつ Kuryłowicz (1956, 1968) の説明図式の問題点を挙げるとするならば、VI 類に存在した長母音は、一気に V 類及び IV 類に拡張したと考えることも可能ではないかということである。というのも、もしゲルマン語母音推移 (e.g. $*\bar{a} > *o$) 以前に (あるいは、van Coetsem 1972 が仮定する「*e-a*-時代に) 当該の形態変化があったとするならば、「VI 類現在 $*CaC-$: V 類現在 $*CeT-$: IV 類現在 $*CeR-$ = VI 類過去複数 $*C\bar{a}C-$: V 類過去複数 X_1 : IV 類過去複数 X_2 」というアナロジーの比例式から、 $X_1 = *C\bar{e}T$, $X_2 = *C\bar{e}R$ を得ることは可能だからである。つまり、過去複数形の長母音が V 類から IV 類に広まったと仮定しなければならない必然性はないように思われる。

さて、Kuryłowicz (1956, 1968) による説明を受け継ぎ、強変化動詞過去語幹のアナロジーによる形態変化とゲルマン語母音推移との相対年代の問題に幾分かの進展をもたらしたのが、van Coetsem (1972) であると思われる。van Coetsem (1972) の提案は、以下の (5) - (7) の図式にまと

められる。

- (5) Reconstructed Examples (found in the final stage of the *e-a*-period, i.e. before the PGmc. umlaut operated): van Coetsem (1972: p.199, Table 1)

<i>e</i> -group			<i>a</i> -group		
Present	Preterit	Past	Present	Preterit	Past
	Singular	Plural			participle
or Optative					
1	*griep- ~ *grāip	~ *grip-,	*grip-	1	*χāit- ~ red./abl. ~ *χāit-
2	*beud- ~ *bāud	~ *bud-,	*bud-	2	*āuk- ~ red./abl. ~ *āuk-
3	*χelp- ~ *χālp	~ *χulp-,	*χulp-	3	*χāld- ~ red./abl. ~ *χāld-
4	*nem- ~ *nām	~ *nēm- ~	*num-	4	*fār- ~ *fār- ~ *fār-
5	*geb- ~ *gāb	~ *gēb- ~	*geb-	5	*grāb- ~ *grāb- ~ *grāb-

- (6) Early Stage (immediately after the \check{a} - \check{o} -merger) = the original ablaut situation in the strong verb: van Coetsem (1972: p.201, Table 2a)

<i>e</i> -group		<i>a</i> -group	
1	} e ~ ā ~ Ø, Ø	1	} ā ~ red. ~ ā
2		2	
3		3	
4		4	} ā ~ ā̄ ~ ā
5	5		

- (7) Late Stage (after $*R > *uR$ in combination with other developments took place): van Coetsem (1972: p.203, Table 4a)

<i>e</i> -group	
1	} e ~ ā ~ Ø, Ø
2	
3	e ~ ā ~ u, u
4	e ~ ā ~ ē ~ u
5	e ~ ā ~ ē ~ e

van Coetsemによれば、(5)に示されるように、ゲルマン祖語の強変化動詞の活用パターンは彼が「*e-a*-時代 (*e-a*-period)」と呼ぶ時代の最終段階で確立されたということである。この時代の特徴のひとつとして、印欧祖語の短母音 **a* と **o* が **ā* に混交し、長母音 **ā*, **ō* が **ǣ* に混交したことがある。(つまり、これらの短および長母音は、まだ同じ音色に保たれていたということである。²⁸ ちなみに、この仮定を用いるならば、先に述べた Kuryłowicz (1956, 1968) による「VI 類動詞の現在語幹: 過去複数語幹 = V 類動詞の現在語幹: 過去複数語幹 X」というアナロジーによる比例式を、より説得力のあるものに改善できると思われる。が、それはさておき、ここでは van Coetsem の提案に焦点を当てることにする。) van Coetsem は、強変化動詞の体系は、*e*- 集団 (*e*-group) と *a*- 集団 (*a*-group) というふたつの集団から構成されていると解釈する。(5) の図式から見て取れるように、*e*- 集団の特徴は過去単数形と過去複数形に母音交替上の差異があることであり、それに対して *a*- 集団の特徴は過去単数形と過去複数形に母音交替上の差異がないことである。²⁹ 次に (6) を見てみよう。van Coetsem は、短母音 **a*, **o* および長母音 **ā*, **ō* がそれぞれ融合した直後の時代を初期段階 (Early Stage) と呼び、この段階において強変化動詞の元々のアブラウト状態 (the original ablaut situation in the strong verb) が存在したとしている。ここでは *e*- 集団と *a*- 集団ともに、活用パターンの下位集団 (sub-groups) がそれぞれ 2 つずつ存在している。過去形に長母音を示さない下位集団と、過去形に長母音を示す下位集団である。³⁰ (6) に示された初期段階が、(7) の後期段階 (Late Stage) に変化するのであるが、この間 *e*- 集団のみに変化が生じている。そしてその変化

28 van Coetsem (1972: 177): "For ablaut ... the period after the \tilde{a} - \tilde{o} -merger (the so-called *e-a*-period ...) offers a convenient starting point to the discussion, because a strong systematization of the ablaut in the system of the strong verb occurred precisely in that period." 同書 p.199: "For the *e-a*-period the symbols \tilde{e} , \tilde{a} , $\tilde{\bar{a}}$ are used ...; they correspond to \bar{e} , a , \bar{o} of the period after the PGmc. umlaut had operated ..."

29 van Coetsem (1972: 200): "Between the *e*- and the *a*-group the morphological patterning is partly the same (pres. ~ pret.) and partly different. For example, there is an ablaut alternation between the pret. sg. and the pret. pl. of the ind. in the *e*-group but not in the *a*-group. This is an important and characteristic difference between the two groups."

30 van Coetsem (1972: 200): "The *e*- and the *a*-groups had their characteristic alternations, originally subdivided into two alternation patterns each ..."

の動機としては、(6) の元々のアプラウト状態の中に存在した *e*- 集団と *a*- 集団との間にある下位集団の分布のずれを解消し、*e*- 集団と *a*- 集団の単一な体系への統合 (the integration of the *e*- and the *a*-groups in one single system) を果たすためであったとされている。³¹ これによって *e*- 集団の第 4 系列 (series 4)、即ち強変化 IV 類動詞は、過去複数形に元々あったゼロ階梯母音の反映形を失い、V 類動詞と同じ長母音を獲得することになったということである。³²

この van Coetsem による説明は Kuryłowicz (1956, 1968) による説明の改善に資する長所もあり、V 類過去複数語幹の長母音がいかにして IV 類対応形へと拡張したかに関する構造的説明もあるものの、本稿で問題としている IV 類、V 類動詞の過去複数形の長母音の由来そのものを明らかにしているとは、残念ながら言えない。それは、(6) に示される初期段階で既に V 類動詞の過去複数形と VI 類動詞の過去形に長母音があることが仮定されており、その長母音がどこからどのようにして発達したかは全く不問に付されているからである。強変化動詞の過去形が印欧祖語の完了形に由来すると仮定した場合、IV, V, VI 類動詞過去語幹に見られる長母音はすべてその起源が謎であり、それらのうち V, VI 類が先に長母音を獲得したのだと根拠もなく (あるいは恣意的に) 想定し、そこから IV 類に長母音が拡張したという説明図式を提示しても、それらの長母音の由来や発達そのものを説明したことになる。この点、Kuryłowicz (1956, 1968) の説明と同様の欠点があると言える。³³

さて、強変化 IV 類動詞の過去複数語幹の長母音は、V 類動詞の対応形から広まったものであるという立場を取るもうひとりの研究者として、最後に Matzel (1970) の議論を取り上げたい。Matzel は V 類過去複数形の長母音が IV 類過去複数形に広まった原因として、V 類動詞と IV 類動詞の語幹の構造の類似性 (語幹母音の後にはひとつのみ子音が続いている) や、双方とも元々は *e/o* の母音交替を採用していたことに加えて、もうひとつ大きな要因があったことを指摘している。それは、IV 類動詞の

31 van Coetsem (1972: 200): "The integration of the *e*- and the *a*-groups in one single system accounts nicely for the synchronic and diachronic facts."

32 van Coetsem (1972: 203): "Of the ... developments subsequent to the \tilde{a} - \tilde{o} -merger, the \tilde{e} -extent in the *e*-group clearly contributed to a stronger uniformity in the basic patterning of the two groups by opposing series 4, 5 to 1, 2, 3."

過去複数形の元々のゼロ階梯の語幹形は、「アオリスト現在 (aorist-present)」と呼ばれるゼロ階梯の現在語幹を示す動詞の場合、その現在語幹と母音が共通となっていたため、現在語幹と異なる母音交替を示す必要があったからだということである。³⁴ Matzel (1970) はその論考の最後で、ゲルマン語強変化動詞の活用パターンの特性として次のことを指摘している。

-
- 33 これに類似して、長母音 **-ē-* が強変化 V 類過去複数形から IV 類過去複数形へと拡張したとする近年の論考として、Schumacher (2005) がある。Schumacher (2005: 603) の次の論をここでは取り上げ、寸評を加えてみたい。“Umgekehrt hat die Ähnlichkeit von **T₁eT₂-*Wurzeln und **R/UeT-*Wurzeln im Germanischen (oder in dessen Vorstufe?) dazu geführt, dass die schwachen Perfektstämme der **R/UeT-*Wurzeln im Germanischen nach dem Vorbild von **T₁æT₂-* (< **T₁eT₂-*) die Form **R/UæT-* erhielten. Zu einem späteren Zeitpunkt wurde die Bildeweise von **T₁æT₂-* auch auf **CeR-*Wurzeln übertragen (**k^hæm-*, Wz. **g^hem-*, LIV² 209f.). Dabei handelt es sich aber um eine strikt einzelsprachliche Entwicklung des Germanischen, denn der schwache Stamm **mun-* (deredupliziert aus **me-mun-* < **me-mŋ-*) zeigt, dass sich **CeR-*Wurzeln ursprünglich anders verhielten als **T₁eT₂-* und **R/UeT-*Wurzeln ...” ここにおいて、ゲルマン語強変化 V 類の過去複数形は印欧祖語の「*bigētun-* 規則」によって生じた完了弱形語幹 **T₁eT₂-* を受け継ぎ、それがやがて IV 類過去複数形にも拡張されたとする図式が提案されている。しかしながら、強変化動詞と過去現在動詞双方が印欧祖語の完了形を継承するならば (Schumacher はそう考えている)、過去現在動詞 **mun-* ‘we/you/they thought’ そのものがなぜ **me-mŋ-* → **mŋ-* > **mun-* → ***mān-* とならなかったか理由が定かではない。印欧祖語における「*bigētun-* 規則」の存在、あるいはその規則のゲルマン祖語での拡張は、疑わしいと言える。過去現在動詞 IV, V 類の (直説法現在) 複数形に存在しない長母音 **-ē-* を、強変化動詞 IV, V 類過去複数形は、「*bigētun-* 規則」とは異なるメカニズムによって獲得したのではないだろうか。
- 34 Matzel (1970: 178): “Wie aber verhält es sich mit dem langen *ē* im Plur. Prät. der IV. Klasse? Dieses ist aller Wahrscheinlichkeit nach aus der V. Klassen übernommen worden. Die Ähnlichkeit der Stammsilbenstruktur beider Klassen und das übereinstimmende Vorhandensein des *e/o*-Ablauts in bestimmten Formen konnte diese Übernahme erleichtern. Dabei ist von Wichtigkeit, dass zwischen den im Präsens dieser Klasse vorhandenen „Aorist-praesentien“ mit dem Stammsilbenvokal *u* im Sgl. und Plur. (got. *trudan*, *wulan*, an. *koma*, *trotha*, *sofa*, aschwed. *knodha*, nordseegerm., z.T. ahd. *cuman*) und der zunächst für den Plural Prät. vorauszusetzenden Form mit *u* (**numum*) kein lautlicher Kontrast in der Stammsilbe bestand. Darin darf man wohl den eigentlichen Grund dafür sehen, dass im Plur. Prät. das *ē* aus der V Klasse übernommen worden ist.”

ゲルマン語（強変化動詞）では、I-VI 類の現在語幹と過去語幹の対立が、例外なく母音の質そして量の対照に基づいている。現在語幹と過去語幹の音による差異化は、最初はまだ印欧語の諸手立てから供給されていたが、後には純粋にゲルマン語の諸手立てからも供給されることになり、それらは「二次的アプラウト」と呼ばれてきた。正当にも、「どんな犠牲を払ってでも差異化すること」をめざす動きについて、語られてきた。³⁵

換言すれば、ゲルマン祖語の強変化動詞 I-VI 類の活用体系が確立するまでに、母音交替の階梯 (ablaut grade) の違いによって現在語幹と過去語幹をはっきりと区別しようとする動きが生成原理として存在したということになる。即ち、過去形が畳音を消失した後、畳音の有無ではなく語幹の母音の違いによって現在形と区別できるよう、形態変化が生じたということである。強変化動詞の活用の形態的発達を説明しようとする際にこの原理を適用することが不可欠であることは、先に Kuryłowicz (1956, 1968) による説明を検討した際にも確認したことである。Matzel (1970) によって提示された見解を、近年 Mottausch (2000: 52-53) も継承している。³⁶ただし既に第 2 節で見たように、Mottausch (2000) は強変化過去形は印欧祖語の完了形にのみ由来するのではなく、完了形と語根ア

35 Matzel (1970: 179): “Im Germanischen beruht die Opposition von Präs.- und Prät.-Stamm in den Klassen I-VI durchgängig auf Kontrasten der Vokalqualität und -quantität. Die lautliche Differenzierung beider Stämme wird anfänglich noch aus idg. Mitteln gespeist, später auch aus rein germanischen, die man als „sekundären Ablaut“ bezeichnet hat. Zu Recht ist von einem Streben nach „Differenzierung um jeden Preis“ gesprochen worden.”

36 Mottausch (2000: 52-53):

Mir scheint, daß nach der Aufgabe der allgemeinen Perfektreduktion und dem Aufkommen des historisch überlieferten Perfektsatzes bei den Verben der nachmaligen 5. Klasse alsbald das Bedürfnis nach einer Unterscheidung des Stammvokals im Perfekt Nicht-Sing. gegenüber dem Präsens entstanden ist (Kuryłowicz 1968: 291), vgl. Etwa zu **metan-* ‚messen‘: Präs. Pl. urg. **metame-*, *-eð/pe-*, *-and/þi*, Perfekt später **metum*, *-uþ/d-*, *-un* (für ältere **-met-mé-*, *-met-é-*, *-met-ur*).

Als Vorbild für die Umgestaltung des Stammvokals war **ǣr-* : **ætum* vorhanden. Nach dessen Muster bildete man jetzt (**mat-* : **mætum*, (zu **setjan-* ‚sitzen‘ : **sætum* u. dgl. Die Brücke bildeten sicherlich die gleich strukturierten Reimverben mit *e + t* (**getan-*, **metan-*, **setjan-*, evtl. **jetan-*, ...).

オリスト形の混交から生じたと考える研究者であることは、注意しておきたい。³⁷

さて、このように Matzel (1970) は洞察力に満ちた提言をしているものの、では IV 類過去複数形にその長母音を広める元となった V 類動詞の過去複数形の形態はどのようにして発達したのか、という疑問は依然残る。この点は次の 3.4 節で検討することにする。

3.4. 長母音 *-æ- の起源について

既に 3.2 節で、完了複数形からの縮約によって強変化 V 類過去複数形の長母音が得られたとする見解について、批判的考察を行った。また 3.3 節では、強変化 VI 類から長母音が V 類、そして IV 類へと拡張したという Kuryłowicz (1956, 1968) の見解にも疑問を呈した。では、「縮約説」や「VI 類起源説」に依拠しないとすれば、長母音 *-æ- の由来についてほかにどのような説明の可能性があるだろうか。

Matzel (1970: 178) は、ゲルマン語の強変化 V 類動詞 *sitjan「座る」が、過去複数形のみならず過去単数形でも長母音を示す例（古高ドイツ語 Weissenburger Katechismus に見られる *gi-saaz* など）を挙げ、対応するラテン語の完了語幹 *sēd-* とも比較して、強変化 V 類の過去形にはふたつの異なる完了形が潜んでいると論じている。即ち、単数形も複数形も一貫して長母音を示す完了形と、単数形に *o-* 階梯、複数形にゼロ階梯母音を

37 ここで取り上げた Matzel の洞察を受け継いだのは、Mottausch のみではない。次の Schumacher および Mailhammer の論を参照されたい。Schumacher (2005: 597): “Im Urgermanischen entwickelte sich also ein morphologisches Prinzip, demgemäß ein starkes Präteritum durch folgende alternative Merkmale gekennzeichnet sein musste. (a) Durch eine Ablautstufe bzw. durch Ablautstufen, die sich von der des Präsensstammes unterscheiden bzw. unterschieden; (b) durch Reduplikation, wobei die Ablautstufe mit der des Präsensstammes identisch ist; (c) durch Reduplikation *und* vom Präsensstamm unterschiedliche Ablautstufe(n). — Wesentlich ist, dass es keine starken Präterita gibt, denen sowohl die Reduplikation als auch eine vom Präsensstamm unterschiedliche Ablautstufe fehlt.” Mailhammer (2007: 97): “The differentiation between present and preterit by means of ablaut is one of the cardinal rules for ablauting verbs, with the past participle being of minor importance in this regard. There is no ablauting verb that does not possess this most fundamental categorial distinction, with the preterit-presents as a clear exception constituting their own subsystem.”

生じる完了形ということである。³⁸ Matzel はこの議論をする際に Lorentz (1898: 77) と Brugmann (1913: 183f.) に言及している。³⁹ Brugmann (1913: 183) が提唱する「印欧祖語の時代にはまだ、語根母音 *e を持つ単一子音で終わる語根では畳音のない長母音 *ē を語根に示す完了形が存在した」という考えは、現在では受け入れられないものである。Matzel の議論では、強変化 V 類過去複数形の語幹母音 *-ā- の起源をそのような畳音のない長母音完了形に帰すことになるが、この主張はとうてい受け入れることはできない。この点については、Mottausch (2000: p.46 (2)) や Mailhammer (2007: 77-78; 特に p.78 fn.96) による批判も参考になる。

他方、強変化 IV, V 類過去複数形の語幹母音 *-ā- の由来についての近年の論考として、Mottausch (2000) が挙げられる。その論考は第 2 節で見たように、完了形とアオリスト形の混交を強変化動詞過去形態の起源とするものであるが、しかし過去複数語幹の長母音 *-ā- 自体の起源を完

38 Matzel (1970: 178): “Das resthafte Auftreten des dehnstufigen Sgl.s [= *sēr*: T.T.] neben der herrschenden Normalform *sat* im Germanischen zeigt an, dass in der Klasse V einmal zwei verschiedene Arten der Perfektbildung miteinander konkurriert haben — solche mit durchgängiger Dehnstufe im Sgl. und Plur. und solche, die nach dem in den Klassen I-IVa vertretenen Prinzip gebildet waren. Zwischen beiden ist es zu einem Kompromiss gekommen: Im Sgl. setzte sich die von alters her vorhandene abgetönte Normalstufe durch; im Plur. wurde das lange, im Übereinstimmung mit dem Lat. (und anderen idg. Sprachen) stehende *ē* durchgeführt, und zwar nicht einfach deshalb, weil — wie Kurylowicz annimmt — dort schon ein Vokal gleicher Klangfarbe vorhanden war, nämlich der kurze *ē*-Vokal, sondern weil zwischen diesem kurzen *ē* und dem kurzen *e* des Präsens keine Opposition von hinlänglicher lautlicher Bedeutung bestand.”

39 Lorentz (1898: 77): “Gleichwohl kann ich mich nicht dazu entschließen, diese *ē*-Formen für lateinische Neubildungen zu halten. Denn von den doch immerhin wenig zahlreichen *ē*-Perfekten haben vier im Germanischen genaue Entsprechungen: *sēdimus* und *sētum*, *clēpimus* und *hlēfum*, *vēnimus* und *qēmum*, *frēgimus* und *brēkum*.” Brugmann (1913: 183): “Neben den durch Formen wie griech. *γέγονα*, *λέλοιπα*, *ἔσταμεν*, *φοῖδα* vertretenen Perfekttypen hat es schon in urindogermanischer Zeit bei einkonsonantisch auslautenden Wurzeln mit *e* wie *sed-*, *g^hem-* einen dehnstufigen Perfekttypus **sēd-*-, **g^hēm-* gegeben, d. h. die dehnstufige Wurzel mit *ē* ohne Reduplikation wurde als Perfekt in derselben Weise flektiert wie die Vorfahren von *γέγονα* usw.” 更には、次に挙げる Brugmann (1916: II. 3/1 p.433) の主張も参照されたい。“Bei einkonsonantisch auslautenden Wurzeln wie *sed-*, *g^hem-* gab es seit uridg. Zeit einen reduplikationslosen perfektischen Stammtypus teils mit *ē*, teils mit dessen Abtönung *ō*, **sēd-* und **sōd-* usw. (sogen. Dehnstufenform).”

了複数形に求めているので、ここで検討してもよいと思われる。Mottauschによれば、問題となる長母音 **ǣ*- は、強変化 V 類動詞 **etan* 「食べる」の過去形、特に過去複数形に由来するということである。即ち、元々印欧祖語で完了形を形成しなかったこの動詞が、ゲルマン祖語の前段階で二次的に完了形を形成し、その複数形 **e-ét-* が、アオリスト形との混交が原因で疊音が一般的に失われる以前の時代に疊音とゼロ階梯の語幹が縮約を起こして **ǣt-* となり、これが VI 類動詞とのアナロジーで単数形にも広がったと考えている。この形が更に他のすべての V 類動詞過去複数形に広がったのは、V 類動詞の現在語幹は元々の *e*- 階梯を反映する *e* を含み、過去複数形の語幹は元々のゼロ階梯を反映する *e* を含んでいて、両者が同じ母音を持つ語幹であった状態を回避するために、そうなったということである。⁴⁰ V 類動詞の過去複数語幹全般に長母音 **ǣ* が広まった後に IV 類動詞の過去複数形にもこの長母音が広まったとのことであるが、V 類から IV 類への **ǣ* の拡張のメカニズムについては、Mottausch は特に何も議論していない。

強変化 IV, V 類過去複数形に見られる長母音 **ǣ*- の出所は、V 類動詞 **etan* の、縮約を受けた過去複数形 **ǣt-* であるという Mottausch (2000) の提案に対して、Ringe (2006: 186) が与えた評価は次の 3 つの言に集約できる。「1) 強変化 V 類過去複数語幹に生じる **ǣ*- の明白な源となるのは「食べる」という意味の動詞の対応形である。2) その動詞が 'be' や 'do' のような高度に一般的な意味を持つのでないならば、いかに頻繁に使われるものであってもひとつの動詞がクラス全体の改変をするにはあまりに小さな基盤である。3) しかし、語頭に **e*- を持つ強変化 V 類動詞は「食べる」という意味の動詞のみであったかどうか分からない。分

40 Mottausch (2000: 47): "Als Grundlage für die Entstehung von Langvokal-Perfekten werden gewisse (nach Laryngalschwund) vokalisches anlautende Verben betrachtet, im Germ. meist ausschließlich *et-* 'essen', in dessen (sekundärem ...) Perfekt Nicht-Sing. mit 'morphologischer SSt' *et-* durch Kontraktion ein Langvokal entstand, der dann analogisch auf andere Verben übertragen worden sei." 同論文 p.50: "Viel ansprechender ist eine Rückführung auf eine nachgrundsprachliche reduplizierte Perfektneubildung. [p.55 note 9: Das Verb, Grundbedeutung wohl 'beißen', bildete ursprünglich kein Perfekt, vgl. ai. *ādmi*, Perfekt aber suppletiv *jaghāsa*.]" 同論文 p.51: "Cowgill 1960: 491ff. setzt Sg. **e-at* an mit nachfolgendem Ausgleich zugunsten des Nicht-Singulars **ǣt-* nach dem Vorbild des einheitlichen Langvokals der 6. Klasse. ... Ich teile grundsätzlich die Auffassung Cowgills."

かっているのは個別ゲルマン語方言に記録されるまで生き残ったそのような動詞は「食べる」という意味の動詞だけだったということである。⁴¹ この論評は、Mottausch の提案を支持しているとも取れるし、疑問を呈しているとも取れる。**etan* 「食べる」の過去複数形、即ち疊音と語根を縮約した **ǣt-* という語形をもとにして、V 類動詞全体の過去複数形が現在語幹の短い母音 **ē* と差異を得るために、長い母音 **ǣ* を語幹母音として獲得したとする図式は、可能な説明図式であるとも言えるかもしれない。しかし同時に、(喉音消失後の時代に) 語頭母音を持つ動詞が **etan* 以外に強変化 V 類に存在した明確な証拠が得られない以上、**ǣt-* だけが過去複数語幹の長母音の基盤を与えたことになる点については、疑問を持つ余地があるとも言える。⁴² いずれにせよ、V 類動詞の過去複数形 (及び IV 類動詞の過去複数形) の語幹母音 **ǣ* の起源として、より多くの動詞形態がその基盤を与えたとする説明図式を構築することができるのであれば、そちらの方がより説得力があるとも言えるのではないだろうか。

3.5. 3人称複数形語尾 **-nt > *-un* の起源について

ゲルマン語強変化動詞の過去形が印欧祖語の完了形のみ由来すると

41 Ringe (2006: 186): “the obvious source for the PGmc. **ē* of these stems [i.e. the class V preterite plural stems: T.T.] is the corresponding stem of ‘eat’. It is true that a single verb, however common, is a very small basis on which to remodel a whole class (unless the verb has a very general meaning, like ‘be’ or ‘do’); but we do not know that ‘eat’ was the only strong verb with initial **e-* that ever existed — we only know that it is the only one that survived to be attested in the daughter languages.”

42 この点については、Mailhammer (2007: 81) の次の言も参照されたい: “Since ... Ringe’s (2006: 186) claim that originally there may have been more vowel-initial verbs, of which only **eta-* survived, is not backed up by any tangible evidence Gmc. **eta-* remains the sole attested basis for the overgeneralization of the long-vowel preterite plural forms in class V.” しかしながら、Mailhammer (2007: p.84 fn.101) では、**eta-* 「食べる」と脚韻を踏む幾つかの動詞 (例えば **meta-* 「測る」や **geta-* 「受ける、得る」) が最初に過去複数形の **ǣ-* を獲得し、アナロジーによる拡張 (analogical spread) の基盤を拡張したという見解を示している: “Theo Vennemann (Munich, p.c.) draws my attention to a number of verbs that rhyme with **eta-*, e.g. **meta-* ‘measure’ and **geta-* ‘receive, get’. It seems plausible that these verbs adopted the lengthened grade first, thereby enlarging the basis of the analogical spread.” 類似的な考察は既に Mottausch (2000: 53) によっても提示されている。脚注36の引用を見られたい。

これまでに多くの学者が仮定してきたが、3人称複数形語尾 **-nt* が何に由来し、どのように発達したのか、これまでの研究では十分に明らかになっていないように思われる。

例えば Jasanoff (1994: 273)⁴³ や Fortson (2004: 307)⁴⁴ のように、ゲルマン語の強変化過去3人称複数形では元々あった完了語尾 **-r(s)* (またはそれに類する語尾) が **-nt* に取って代わられたと仮定せざるを得ないが、そのような変化を実現した具体的なメカニズムは明らかになっていない。更には、Bammesberger (1986: 96), Kümmel (2000: 56), Jasanoff (2007: 243 fn.6) などとはやや異なる論を提出しているが、⁴⁵ それらも当該の問題を十分に解決していないことは明らかである。

他方、Schumacher (1998: 181) は、**-R- > *-uR-* の音変化が完了した後に、接続法 (< 印欧祖語希求法) 3人称複数語尾 (secondary ending) が直説法過去3人称複数形語尾として用いられるようになったという見解を示している。⁴⁶ しかし、接続法3人称複数語尾 (termination) は **-ī-n* (< **-ih₁-ent*) であり、ここから **-un* という形を借りることは不可能であろう (もし借りたならば、強変化過去3人称複数語尾は ***-n* となっていたであろう)。また、インド語 (Vedic Sanskrit) では完了形3人称複数語尾 *-ur* が希求法能動形3人称複数形に拡張したと主張しているが、これはそう

43 脚注3における引用を見られたい。

44 Fortson (2004: 307): “The original 3rd pl. ending **-ēr* was replaced at some point by **-un(t)* [sic: *-un(b)?*] from **-nt*, an aorist ending.”

45 Bammesberger (1986: 96): “Von dem grundsprachlichen Personalkennzeichen für 3. Pl. *-r* ist urg. *-ur* als Reflex zu erwarten. Die Form urg. *-ur* wurde an die sekundäre Endung *-n* angeglichen.” Kümmel (2000: 56): “3 Pl. Inj. **-f* ... ersetzt durch **-nti* in gr. **-oti > -oσι(v)*, durch *-nt* in germ. **-un*.” Jasanoff (2007: 243 fn.6): “In fact, it is highly unlikely that the roots *bheid-* ‘split’ and *bhendh-* ‘bind’ formed perfects as early as the period of the parent language; if they did, their 3 pl. forms would have had [sic] ended in **-ēr* or **-r*, not **-nt*.”

46 Schumacher (1998: 181): “Es wird vielfach angenommen, dass **-f* zu einem frühen Zeitpunkt durch **-nt* ersetzt wurde (vgl. Kümmel 2000: 56); es erscheint ebenso möglich, dass der Ersatz zu einem späteren Zeitpunkt erfolgte, dass also nach Ausbildung des urgermanischen Lautstands ein **-ur* durch **-un* ersetzt wurde. Vorbild für diese Umgestaltung der 3Pl waren andere Kategorien mit Sekundärendungen, im Falle des Germanischen also wohl der Optativ. Eine solche Übertragung hat eine interessante Parallele im Altindischen, wo sich umgekehrt die Endung *-ur* des Perfekts auf andere Kategorien mit Sekundärendungen ausgebreitet hat, etwa auf das Aktiv des Optativs.”

であるかどうか必ずしも明らかではない。例えば Jasanoff (1991: 111ff.; 1997: 124f.) は、これとは異なる説明を与えている。加えて、Ringe (2011: 504) では、「過去現在動詞の直説法 3 人称複数語尾 **-un* は強変化動詞 (の直説法過去 3 人称複数形) から広まったもので、それは他方、弱変化過去や *'did'* (印欧祖語の未完了形で唯一ゲルマン祖語に残ったもの) から語尾 **-un* を獲得した」という見解が示されている。⁴⁷ しかしながら、これは実質的に Ringe (2006: 158f. and 193) で提案された論と同じものであり、受け入れがたい。この見解への批判的考察は、Tanaka (2009: 6-11) に譲る。

3.6. 強変化V類動詞に散発的に見られるヴェルナーの法則の適用について

強変化動詞過去形が祖語完了形にのみ基づくという「標準的見解」を批判する根拠のひとつとして、Prokosch (1939: 163) は1939年の段階で、強変化 V 類過去複数形に時折 (あるいは不規則的に) ヴェルナーの法則が適応されているという事実に着目した。⁴⁸ また、本稿本文の後の補遺に

47 Ringe (2011: 504): “their [= preterite-present verbs’: T.T.] indic[ative] 3pl. in **-un* has spread from the strong preterite, which in turn acquired it from the weak preterite and *'did'* (the only PIE imperfect surviving in PGmc.)”

48 Prokosch (1939: 163): “Verner’s Law ... is remarkably regular in classes I, II, III, but in classes V, VI, VII it is either entirely missing, or it appears sporadically and in irregular distribution over tenses. This indicates that the assumed distribution of the accent (root accent in singular, suffix accent in the plural) is valid only for the first three classes, while the other four classes had different accent conditions.” 同書 pp.183-185:

Old High German: Class V. *s/z*: with *lesan*, *lārun* occurs, but *lāsun* is more frequent in every century. *jesan*, *kresan*, *ginesan* have no change (except for the very rare *ginārun*). *wārun*, however, is used everywhere (but the participle in *giwesan* has *s*, although here we surely should expect Verner’s Law). ...

Old English: Class V. 4 verbs have the change regularly: *sēon*, *gefēon*, *wesan*, *cwēpan* (the last is not quite certain on account of the confusion between *ð* and *d*). *genesan*, *lesan* do not change. For *sēon*, *gefēon*, the desire for contrast to the present may have been a contributing factor, since the unchanged forms of the preterit plural would have been *sōn*, *gefōn*.

Old Norse: Class V. *vesa* has the change, which later is transferred to the present and preterit singular (*vera*, *var*, *vǫro*), probably due to lack of sentence stress; as in West Germanic, *siā* has *sōm* in the preterit plural.

挙げたデータを参照されたい。ここで問題となるのは、なぜ散発的にのみV類過去複数形の語幹末無声摩擦音が有声化されるのかという点である。ゼロ階梯語幹を持つ完了複数形からの発達ならば、I-III類でそうであるように、規則的にヴェルナーの法則による有声化が適用されていてしかるべきであるが、そうっていないのはなぜだろうか。

Prokosch以降、強変化動詞IV、V類の過去複数形形態を考える論考で、この点を正面から取り上げているものを私は知らない。⁴⁹しかしながら、強変化動詞V類におけるヴェルナーの法則に関わる事実は、強変化動詞IV、V類の過去複数形形態の発達を解明するための重要なヒントを与える現象となっている可能性があるように思われる。このことについて、第4節で再び考えてみたいと思う。

3.7. まとめ

本節（第3節）ではゲルマン語強変化過去の語形が印欧祖語の完了形のみ由来とする学説を検討した。その結論として、次の5点を残された問題として提示することができる。

- 1) 畳音のついた完了複数形において、畳音とゼロ階梯語幹との縮約から長母音 *ē > *ā が生じたとする「縮約説」は、ゲルマン語強変化IV、V類の過去複数形に見られる長母音生成の説明とし

49 Schumacher (2005) では、強変化V類過去複数形の由来の説明を試みるにあたってこの問題について全く考慮していない。彼の「bigätun-規則」に基づく説明（のみ）では、この現象に説明を与えられないことは明らかである（脚注13と33を参照）。また、脚注19で触れた「Klingenschmittの法則」の観点から強変化動詞IV、V類の過去複数形形態の由来を説明しようとした際にも、このようなヴェルナーの法則の散発的な適用という事実に適切な説明を与えることは困難だと思われる。他方、Mailhammer (2007: 77f.) は、古英語の *wæs* 'was': *wæron* 'were', *cwæp* 'he spoke': *cwædon* 'we spoke' の例を取り上げて、延長階梯を示す語根母音にアクセントが置かれられないというパターンは印欧祖語の形態システムから逸脱するものであると指摘し、これが「印欧祖語分裂後の発達」（あるいは、ゲルマン語派内の改新）に基づくものだと示唆している。この見解は正しいと言えるが、それが具体的にどのような発達（あるいは改新）によって生じたのか、明示的な提案は行っていない。また、上記の古英語の例のように、強変化V類過去複数形においてヴェルナーの法則が観察される事象は散発的にしか生じていないのはなぜかという点についても、説明を行っていない。

- ては受け入れがたい。音法則からはこのことが実現しないからである。
- 2) Kuryłowicz's (1956, 1968) のように強変化 VI 類の過去形の長母音が V 類へ拡張し、そしてその後 IV 類に拡張したとする説は受け入れがたい。VI 類過去形語幹がいかにして長母音を獲得したかは解明されておらず、長母音を持つ VI 類過去形が IV, V 類過去形に先立って確立されたと想定するだけの根拠がないからである。
 - 3) 後に強変化 V 類となる動詞のうち、*etan「食べる」がその完了複数形において暁音と語幹の間に縮約を起こし、過去複数語幹に長母音を含む *ēd- > *æt- を発達させ、この長母音が後に V 類動詞過去複数形全般に広まったとする説明は、不可能ではない。しかしながら、*etan というひとつの動詞のみから長母音が広まったという考えには疑問を持つ余地が残る。過去複数語幹の長母音の起源として、より多くの動詞がその基盤を与えたとする説明ができるとすれば、その方が説得力があると言える。
 - 4) 強変化動詞 3 人称複数過去形語尾 *-nt (> *-un) がいかにして元々の完了 3 人称複数語尾 *-r(s) (> *-ur) から発達したか、あるいはそれにとって替わったかについて、これまで満身に説明されたことがない。
 - 5) 強変化動詞 V 類過去複数形で散発的にヴェルナーの法則が生じているのはなぜか、これまで満身に説明されたことがない。

これらのうち、特に 4) と 5) については、Prokosch (1939: 162f.) が「完了形のみ由来とする説 = 標準的見解」への批判として提示した問題であるが、それ以来 70 年以上が経過しても真に有効な解決策が提示されていないことに注意したい。

第 4 節 新たな展開に向けて

ゲルマン語強変化 IV 類、V 類動詞の過去複数形の由来に焦点を当て、従来なされた主要な研究成果についてここまで検討を重ねてきた。第 2 節では「語根アオリストとの混交説」について、第 3 節では「完了形のみ由来とする説」について、どのような問題が残っているかにつ

いて、考察した。第4節では、当該の問題に関してこれまでの研究とは異なる新たな展開が得られる可能性はないか、考えてみたい。具体的には、ゲルマン語強変化動詞（特にI-V類）の過去形は、印欧祖語の完了形と未完了形(imperfect)の混交から生じたとする新たな説明図式の可能性について論じたい。

4.1. IV類、V類過去複数語幹に見られる長母音 **-æ-* の起源について

ゲルマン語強変化動詞IV類、V類動詞の過去複数語幹に見られる長母音 **-æ-* がどこから来たのかという問題に、新たな光を与える可能性がある研究動向が近年見られる。それは、Jasanoffとその弟子によるラテン語延長階梯完了形の由来についての諸研究である。

Jasanoff (1998: 307) は、ラテン語の *agō* 「行う、駆り立てる」の完了形 *ēgī* について、興味深い分析を提供している。⁵⁰ この完了形 *ēgī* は元々 **āgī* であり、畳音のついた完了形 **h₂e-h₂ǵ-* の反映形であると伝統的には考えられてきたものの、その解釈は疑わしいと Jasanoff は主張する。その理由として、**āgī* という完了形はラテン語の資料に全く登場しないこと、また、元々の活用が *agō*: **āgī*: *actus* であったとするならば、そこからどのようなメカニズムで *agō*: *ēgī*: *actus* と改変されたのか不明であるということが挙げられている（「壊す」という意味の動詞の活用 *frangō*: *frēgī*: *fractus* は由来不明で、かつ生産的なパターンではない）。ここから Jasanoff は、長母音を持つ完了形 *ēgī* は、元々の延長階梯母音を持つ **h₂ēǵ-* という語形に由来すると解釈すべきであると述べている。長母音 **ē* が先行する **h₂* によって音色を変えられることがないのは、アイヒ

50 Jasanoff (1998: 307): “Another well-known “thematic” root with an old Narten present is **h₂ēǵ-* ‘drive’ (cf. Ved. *ājati*, Gk. *ἄγω*, Lat. *agō*, etc.), which, like **bher-*, was confined to the present system in the parent language. Here the only indication of lengthened grade — but a powerful one — is Lat. *ēgī*, a long-vowel perfect of the same type as *lēgī*. The traditional view takes *ēgī* to be the replacement of an older **āgī*, itself supposedly the reflex of a reduplicated perfect **h₂e-h₂ǵ-*. But no such perfect ever existed, and if it had, it is hard to see why the pattern *agō*: **āgī*: *actus* would have been remade to conform (imperfectly) to the pattern of the historically obscure and isolated *frangō*: *frēgī*: *fractus* ‘break’. A better solution, if *lēgī* is in fact an archaism, would be to take *ēgī* as the reflex of a genuine lengthened-grade **h₂ēǵ-*, with **-ē-* preserved by Eichner’s Law.” これに関連して、Jasanoff (2003: p.31 fn.5 and p.224) も参照されたい。

ナーの法則 (Eichner's Law) による (Eichner 1973: 72参照)。この主張によれば、ラテン語延長階梯完了形 *ēgī* はナルテン現在 (Narten present) の過去形、即ちナルテン型の未完了形 (imperfect) の反映であるということである。伝統的には、ラテン語の完了形は印欧祖語の完了形及びアオリスト (特に *s*-アオリスト = sigmatic aorist) の混交であると考えられてきたのであるが、⁵¹ Jasanoff の主張が正しいとすれば、ラテン語の完了形には祖語の完了形と (*s*-) アオリストのみならず、未完了形 (imperfect) も形態的には継承されているということになる。(ちなみに、ラテン語完了形では、*s*-アオリストにしても、ナルテン未完了形にしても、元々の強形 (strong form)、即ち長母音を持つ語幹が、単数形のみならず複数形にも一般化されている。)

Jasanoff (1998) によるこの議論に続き、Pike (2009) はラテン語 *clepō* 「盗む」の完了形には通常見られる *clepsī* 以外に長母音を含む語幹 *clēp-* によるもの (例: 現在完了 3 人称単数 *clēp-it*; 未来完了あるいは完了接続法 3 人称単数 *clēp-erit*) が記録されていることを指摘し、その由来に関する提案を行っている。Pike はこの *clēp-* がトカラ語 B の第 1 類現在形 *klyeptrā* 「彼 (女) は盗む」と対応することから、印欧祖語のナルテン型の未完了形 **klēp-* に由来するとしている。⁵²

更に、Weiss は 2009 年出版のラテン語ハンドブックにおいて、ラテン語長母音完了形の由来について注目すべき記述をしている。即ち、*ēdī* 「食べた」、*lēgī* 「集めた」、(*sur*)*rēgī* 「支配した」、*ēgī* 「駆り立てた」、*sēdī* 「座った」などの長母音完了形は、古いナルテン現在の未完了形であり、古いナルテン現在 (Narten present) が新たな語幹形成母音による現在 (thematic present) に取って替わられた時に、古い延長階梯形の未完了形は押しやられ、ついには完了体系の一部となったということである。

51 Buck (1933: p.291 §410): “The Latin perfect is a blend of the IE perfect and aorist, both in form and in function” and Sihler (1995: p.579 §522): “The development of the L[atin] tense known as the perfect followed a course altogether unlike G[reek]. The greatest difference was manifested from the outset, namely the L[atin] tense is a conflation of the PIE aorist and stative; its function was basically aoristic/completive.”

52 印欧祖語の **o* と **ē* はトカラ祖語で混交して前舌中母音となり、トカラ語 A では *a* となり、トカラ語 B では *e* となる (例: 印欧祖語 **ph₁tēr* > トカラ語 A *pācer*, トカラ語 B *pācer*; Fortson 2004: 355参照)。

Weissはこの解釈が学者間の共通見解ではないと述べているが、⁵³1993年にコーネル大学に提出された彼の学位論文の pp.178-181では、ラテン語の延長階梯完了形を形成する動詞語根のうちの4例(**h₃reg-* ‘straighten’, **h₁ed-* ‘bite, eat’, **sed-* ‘sit’, **h₁em-* ‘take’) について、それらがナルテン現在を形成するものであったことを示す経験的証拠を挙げている。⁵⁴

Jasanoff, Pike, Weiss らの見解がもし正しいとするならば、それはゲルマン語強変化 IV, V 類過去複数形に生じる長母音の起源についても、新たな解釈の可能性をもたらすように思われる。Weiss が考えるように、ラテン語の長母音完了形は印欧祖語に存在したナルテン型の未完了形の強形を複数形にまで一般化した形態を反映しているとするならば、ゲルマン語強変化 IV, V 類過去複数形でも同様にナルテン型未完了過去形の強形が受け継がれていると考えることが可能である。⁵⁵ 即ち、ラテン語 *sēdimus* とゲルマン語 **sētum* の対応を説明するにあたり、Brugmann (1913) のように「豊音のない、長母音 **e* を語幹に示す完了形」を祖語に設定する必要はなく、ラテン語においてもゲルマン語においても過去を表しうる動詞形態のうち、豊音がなく長母音 **e* を語幹に示す動詞形態は印欧祖語の動詞体系に存在したナルテン型の未完了形の反映であると考えるのが、最も適切であると思われる。

53 Weiss (2009: 412f.): “These [i.e. Latin lengthened-grade perfects such as *ēdī* ‘have eaten, ate’, *lēgī* ‘(have) collected’, (*sur*)*rēgī* ‘(have) ruled’, *ēgī* ‘have driven, drove’, and *sēdī* ‘(have) sat’: T.T.] are the old imperfects of Narten presents. When the old Narten presents were replaced with innovative thematic forms the old lengthened-grade forms of the imperfect were shunted off, and eventually ended up as part of the perfect system. [p.413 fn.13: It should be noted that the view presented in the text is not *communis opinio*.]”

54 Weiss (1993: 178-181): “Normally, of course, the Latin *perfectum* derives from the PIE aorist and perfect. But [it] is interesting to note that some Latin lengthened grade perfects belong to roots with clear Narten characteristics.” (p.179); “Given this correlation between lengthened grade perfects and Narten roots, it seems worthwhile to explore the hypothesis that these lengthened grade perfects originated as the imperfects of Narten presents. One could assume that when the athematic Narten presents were replaced by simple thematic presents the Narten ablaut was maintained in the somewhat marginal category of the old PIE imperfect. With the development of a new periphrastic imperfect these form[s] were shunted off [f] into the *perfectum* system since they were sufficiently distinct from the innovated stem of the *infectum*.” (p.181). これに関連して、Jasanoff (2003: 193) および Fortson (2004: 93) も参照されたい。

4.2. 3人称複数形語尾 **-nt > *-un* の起源について

第2節で検討した「印欧祖語の完了形と語根アオリストとの混交説」に代わり、ゲルマン語強変化動詞（特にその I-V 類における）過去形の形態は、印欧祖語の完了形と未完了形との混交から生まれたという説明図式を検討するにあたり、そこから説明がつく可能性のある現象として、強変化過去3人称複数形語尾の問題を取り上げたい。

ゲルマン語で強変化動詞となっている動詞のうち、継続的な語彙的アスペクト (lexical aspect; Aktionsart) を持つ動詞語根に遡るものは、印欧祖語の初期段階において語幹形成母音によらざる語根現在形 (athematic root present) やそれに対応する未完了形を形成していたと思われる。そのような未完了形の中には、通常のアムフィキネティック型のもの、ナルテン型 (あるいはアクロスタティック型) のものがあったと考えられる。⁵⁶

ゲルマン語強変化動詞の過去3人称複数形語尾の **-nt > *-un* は、ナルテン型の未完了形の語尾に一致する。Narten (1968: 13) によれば、印欧祖語のナルテン型の現在形あるいは未完了形は「アクセントのある盈階梯 (Vollstufe, full grade) を複数形と分詞において (示し)、更には、低減階梯 (Schwundstufe, reduced grade) を3人称複数語尾 (**x-nti*) と分詞を形成する接尾辞 (**x-nt-*) において (示す)」⁵⁷ という形態的特徴を持ち、それらは例えばヴェーダ語の3人称複数現在形 *tákṣati* 「彼らは形造る」や分詞 *tákṣat-* 「形造る (ような)」に残っているということである。このこ

55 近年 Jasanoff (2010) は、印欧諸語に見られるいわゆる「長母音過去形 (long-vowel preterites)」は印欧祖語におけるナルテン型の未完了形を反映したものであると論じている。そこにおいて、ゲルマン語強変化動詞 V 類の過去複数形の語根に見られる長母音 **ē* はナルテン未完了形に由来するという本稿の提案と同じ見解を示しているものの、強変化動詞 IV 類に見られる同じ長母音は V 類からのアナロジーによる拡張という伝統的立場を保持している (p.2 “Strong verbs of class V, and by analogy class IV, show **ē* for expected zero grade in the preterite plural”). Jasanoff のこの論文は、**b^her-om*, **lēg-om* タイプの語幹形成母音による未完了形を「記述的未完了形 (descriptive imperfects)」、**b^hēr-ŋ*, **lēg-ŋ* タイプのナルテン型未完了形を「物語の未完了形 (narrative imperfects)」と分類し (p.9)、後者を「印欧祖語分裂後の時代にれっきとしたアオリストとなる素因を与えられた、独特の、アオリストの傾向のある未完了形 (“imperfects of a distinctive, aorist-tending type that predisposed them to become full-fledged aorists in the post-IE period”）」(p.10) と定義している。この提案についての管見は別稿で述べることにする。

とから、完了形語尾に由来するとは到底思えない、強変化過去3人称複数形語尾の **-nt > *-un* は、ナルテン型の未完了形の3人称複数語尾が一般化されたものである可能性がある。⁵⁸

Ringe (2006: 157) は、ゲルマン祖語で現在 (present) と過去 (preterite) の2つの時制 (tense) の対立に基づく動詞体系が生成される過程において、祖語から継承された完了直説法 (perfect indicative) とアオリスト直説法 (aorist indicative) は同じ機能 (即ち瞬時的過去) を持つようになったため、後者が失われ前者が生き残ったとしている。そのためにゲルマン語ではアオリスト直説法の反映形が見つからないということである。⁵⁹ アオリスト直説法が失われた後、瞬時的過去を表す完了形と持続

-
- 56 アムフィキネティック型 (amphikinetic type) の活用とは、強形 (strong form) では盈階梯母音 (full-grade vowel) を持つ語根にアクセントが置かれ、弱形 (weak form) では語尾にアクセントが置かれるタイプである。これに対してナルテン型 (Narten type) またはアクロスタティック1型 (acrostatic 1 type) とは、強形では延長階梯母音を持つ語根にアクセントが置かれ、弱形では盈階梯母音を持つ語根にアクセントが置かれるタイプである。現在広く受け入れられている「アクセントとアブラウトのパラダイム (accent and ablaut paradigms)」に関する枠組みについては、Szemerényi (1996: 161f.), Meier-Brügger (2003: 204ff.), Fortson (2004: 107ff.), Tichy (2006: 74ff.), Clackson (2007: 79ff.), Weiss (2009: 257ff.), Gotō (forthcoming: 7f.) などの主要なハンドブックを参照されたい。
- 57 Narten (1968: 13): “akzentuierte Vollstufe im Plural und im Partizip sowie ... Schwundstufe in der Endung der 3. Pl. (**x-nti*) und im Partizipialsuffix (**x-nt-*)” .
- 58 無論、なぜアムフィキネティック型の未完了3人称複数形語尾 **-ént* が一般化されなかったのかという問題がここでは残るが、この点についての議論は Tanaka (2010: 11) に譲ることにする。
- 59 Ringe (2006: 157): “More often it appears that a PGmc strong past is descended from an innovative post-PIE or pre-PGmc perfect that probably had resultative force when it was first formed. ... An important consequence of this semantic development was that the perfect indicative and aorist indicative became isofunctional in pre-PGmc, and were therefore in competition. So far as can now be determined, the perfect ‘won out’ completely; there are no plausible reflexes of the aorist indicative *at all* in any Germanic languages.” これに加えて、Mailhammer による次の言も参照されたい。Mailhammer (2006: 14): “it is just as plausible to posit that the Pre-Germanic perfect replaced the aorist as a (past) perfective tense, which could have preserved the aspectual system.” Mailhammer (2007: 113): “In Germanic, none of the features often associated with the aorist has to be considered compelling evidence. ... [A]t least for the time being, it has to be assumed that the aorist in Germanic disappeared without leaving a trace ...”

的過去を表す未完了形が混交して、相 (aspect) に関して中立的な「強変化過去 (strong preterite)」という新たな動詞時制が生み出されたと考えることができる。

4.3. 散発的なヴェルナーの法則の適用について

ゲルマン語強変化動詞 I-V 類の過去形は印欧祖語の完了形と未完了形の混交であったとするならば、強変化 V 類動詞の過去複数形に散発的に見られるヴェルナーの法則 (Verner's Law) の適用についても、説明ができるかもしれない。ナルテン型の未完了形の強形が一般化されたものとアムフィキネティック型の未完了形の弱形が、強変化 V 類の過去複数形生成の際に、競合していたと考えてみよう。この両者のアクセントの型の違いが、問題となる現象に反映している可能性はないだろうか。つまり、ナルテン型の未完了形では常に語根にアクセントがあった。それに対し、アムフィキネティック型の未完了形の複数形 (即ち弱形) では、語尾にアクセントがあった。これらの異なるアクセントのパターンが、何らかの事情によって双方とも強変化 V 類過去形に継承され、その結果、ゲルマン祖語ではヴェルナーの法則の適用を受けた形とそうでない形双方が存在していたと考えることはできないだろうか。⁶⁰ ゲルマン祖語の段階で双方のアクセントパターンの語形が残っていたとするならば、ゲルマン語方言において、そのどちらか (あるいは両方) を受け継いでいることの説明となると思われる。

4.4. 強変化動詞の形態音韻的環境について

第 3 節で、van Coetsem (1972) が提案した説明図式について触れた。そこに引用された (5) を再び見られたい。この図式に関連して不思議に思うのは、先駆的な研究を打ち出した Kurylowicz (1956, 1968) がその論考においてオストホフの法則 (Osthoff's law) について頻繁に触れているのに対し、van Coetsem (1972) はその議論の中でこの音変化に関して何も言及していない点である。(5) の図式から、次に挙げる (8) のような区分けをすることは困難ではない。

60 無論、具体的にどのようなメカニズムでそうなり得たかを明らかにしなければならないが、この点については Tanaka (MS) での議論に譲る。

(8) オストホフの法則適用に関する環境 ((5) と比較されたい)

- 1 CViC- (I & VII)
- 2 CVuC- (II & VII) ➡ 適用される
- 3 CVRC- (III & VII)

-
- 4 CVR- (IV & VI) ➡ 適用されない
 - 5 CVT- (V & VI)

ここにおいて C はあらゆる子音、V は母音、T は阻害音、そして R は共鳴音を表す。

即ち、系列1, 2, 3 (series 1, 2, and 3) は動詞語幹の形状からしてオストホフの法則による母音短化の環境となっているのに対し、系列4, 5 (series 4 and 5) はそうではないという図式である。⁶¹ 強変化IV類、V類動詞の過去複数形に生じる長母音の起源と発達に関する研究の今後の新たな展開を考えるにあたり、(8) に示される図式は重要な説明原理を与えるように思われる。

また、これに加えて、第3節で検討した Matzel (1970) の提案を生かすことも重要だと考えられる。すなわち、ゲルマン語強変化過去の形態的体系を確立する際には、過去語幹と現在語幹に明白な形態的差異が生じるようにしたという原理である。強変化I-VI類の場合は、これを語幹母音の母音交替の階梯における差異によって実現したと考えられる。(それに対して強変化VII類では、母音交替の階梯よりもむしろ畳音の有無によってそれが実現したと考えられる。)

これら二つの観点を組み合わせると、強変化I～III類の過去複数形と、強変化IV, V類の過去複数形との間に見られる形態的相違に、説明を与えることができるように思われる。(8) の図において、系列1～3に属する強変化I～III類では、語根の形状そのものがオストホフの法則が適用

61 系列4 (series 4) は実際の活用形においては、この点について両義的であることには注意が必要である。子音で始まる語尾が付く場合には、オストホフの法則による母音の短化を受ける環境となるが、母音で始まる語尾が続く場合にはそうではない。が、母音で始まる語尾がつく形態が存在する以上、オストホフの法則による母音の短化を受けない形態が存在し、そのような語形が一般化される可能性がある。以下、この可能性を前提として論を進めることにする。

される環境にあるため、長母音 *ē を語幹に持つナルテン型の未完了形が過去複数形の元となっていたとしても、語根母音の短化を受けるので、それは短母音 *e となる。これでは語幹形成母音による現在 (thematic present) の e- 階梯の語幹母音と同じなので、現在形と適切な差異を示すことができない。従って、ゼロ階梯の語幹母音を持っていたアムフィキネティック型の未完了形の方が、現在形との差異を示すことができるため、I～III 類の過去複数形に一般化されたと思われる。それに対し、(8) の図において系列4～5に属する強変化 IV, V 類では、語根の形状そのものがオストホフの法則が適用される環境にはないため、ナルテン型の未完了形はその長い語幹母音 *ē をそのまま保つことができたと思われる。e- 階梯の語幹母音を示す現在形と十分な差異があるため、この形が IV, V 類の過去複数形に一般化されることになったと考えられる。⁶²

第5節 結論

第4節の議論で新たな研究の展開として示唆したことは、ゲルマン語の強変化動詞の過去形は、印欧祖語の完了形のみ由来するのではなく、印欧祖語の完了形と未完了形 (imperfect) との形態的混交から成り立っている可能性があるということである。更には、未完了形のうち、ナルテン型の母音交替を持つものが、強変化 IV, V 類の過去複数語幹の長母音の起源となっているかもしれないということである。

Kuryłowicz (1956, 1968) のように、VI 類過去形の語幹に最初に長母音が獲得されて、それが V 類過去語幹に拡張され、更にそれが IV 類語幹に広まったと独立的根拠もなく想定するのではなく、一見奇妙に見える IV, V 類過去複数語幹の長母音、そして VI 類過去語幹の長母音は、実質的に同時に強変化動詞の活用体系に具現されたとする説明図式が得られ

62 これらの点に関する詳細は、Tanaka (2010) を参照されたい。尚、IV 類の場合、アムフィキネティック型の未完了過去形の弱形は語幹母音がゼロ階梯となり、ゲルマン祖語では母音 *u が生じ、これではアオリスト現在 (aorist present) と呼ばれる現在形で同じ母音が生じることとなり、現在形との区別ができないことになる (3.3節の脚注34での Matzel 1970: 178 の論を参照)。V 類の場合でも、アムフィキネティック型の未完了形の弱形は語幹母音がゼロ階梯となり、ゲルマン祖語で母音 *e が具現したとすれば、語幹形成母音による現在形 (thematic present) の語根母音 *e と区別がつかないことになる。

るとするならば、それが最も望ましいと考えるものである。

そのような説明図式が実際に得られるかどうか、その詳細も含めた理論構築に今後取り組んでみたいと思う。そこで重要となるは、ゲルマン語 IV 類、V 類に属するそれぞれの動詞が印欧祖語でどのような活用をしていたかという点を明らかにする作業だと思われる。各々の動詞について、その活用パターンの歴史的特性を印欧語資料に基づいて明らかにした上で、説明的な理論を構築することが肝要である。

補遺 (Appendix) : 強変化 V 類動詞過去複数形に見られる散発的な語幹末無声摩擦音の有声化

A.1. ゴート語以外はすべてヴェルナーの法則の適用が見られる例

(1) **wesana*ⁿ ‘stay, be’; cf. Seebold (1970: 561) as well as Prokosch (1939: 172)

	Inf.	pret. sg.	pret. pl.	pret. part.
Go.	wisan	was	wesun	undocumented
ON	vesa, vera	vas, var	vōrom	verenn, vesenn
OE	wesan	wæs	wæron	(-weran, -woran)
OFris.	we(i)sa	was	wēron	wesen
OS	wesan	was	wārun	undocumented
OHG	wesan	was	wārun, wāsun	-weran

(2) **seχ*ⁿ*ana*ⁿ ‘see’; cf. Seebold (1970: 387):

	Inf.	pret. sg.	pret. pl.	pret. part.
Go.	saihvān	sahu	sehun	saihvans
ON	sjá	sá	sóm, sóm (ságom)	sénn
OE	sēon	seah, seag	sāwon, sǣgon	sewen, sēn, segen
OFris.	sia	sach	sēgon	sien, sēn
OS	sehan	sah	sāwun, sāun, sāhun	sewan, sehan, seen
OHG	seh(h)an	sah	sāhun, sāgun	gi-sewan, gi-sehan

A.2. ゴート語以外の複数のゲルマン語においてヴェルナーの法則適用が見られる例

(3) **kwepana*-ⁿ ‘say’; cf. Seebold (1970: 318f.):

	Inf.	pret. sg.	pret. pl.	pret. part.
Go.	qīpan	qap	qepun	qīpans
ON	kveða	kvað, kvat, kvad, kóð	kvóðom, kóðom	kveðenn
OE	cweðan	cwæð	cwædon	cweden
OFris.	quetha	queth	quēthon	quethen
OS	quethan quedan	quath quad	quādun, quāthun	-quedan, -quethan
OHG	quedan chedan, chodan	quad quat	quādun, quātun	gi-quetan gi-quedan

A.3. 古高ドイツ語のみにおいてヴェルナーの法則適用が見られる例

(4) **lesana*-ⁿ ‘collect, gather’; cf. Seebold (1970: 332):

	Inf.	pret. sg.	pret. pl.	pret. part.
Go.	lisan	undocumented	lesun	lisans
ON	lesa	las	lósom	lesenn
OE	lesan	læs	læson	lesen
OFris.	lesa	les	undocumented	ge-lesen, ge-leren
OS	lesan	las	lāsun	gi-lesan
OHG	lesan	las	lārun, lāsun	gi-leran, gi-lesan

(5) **nesana*-ⁿ ‘come back’; cf. Seebold (1970: 359):

	Inf.	pret. sg.	pret. pl.	pret. part.
Go.	-nisan	-nas	-nesun	undocumented
OE	nesan	næs	næson	nesen
OS	-nesan	-nas	undocumented	undocumented
OHG	-nesan	-nas	-nārun, -nāsun	-neran, -nesan

A.4. 両義的な例

(6) *swefanaⁿ ‘sleep’; cf. Seebold (1970: 482):

	Inf.	pret. sg.	pret. pl. ⁶³	pret. part.
ON	sofa	svaf	svófum, sófum	sofenn
OE	swefan	swæf	swæfon	undocumented

参考文献

- Bammesberger, Alfred 1986 *Der Aufbau des germanischen Verbalsystems*. Heidelberg: Winter.
- Boutkan, Dirk 1995 *The Germanic ‘Auslautgesetze’*. Amsterdam: Rodopi.
- Brugmann, Karl 1897-1916 *Grundriß der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen*, 2nd edition, 5 vols. Straßburg: Trübner.
- 1913 Zu den Ablautverhältnissen der sogenannten starken Verba des Germanischen. *Indogermanische Forschungen* 32: 179-195.
- Buck, Carl Daring 1933 *Comparative grammar of Greek and Latin*. Chicago: University of Chicago Press.
- Clackson, James 2007 *Indo-European linguistics: An introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Coetsem, Frans van 1972 Proto-Germanic morphophonemics. In van Coetsem, Frans and Kufner, Herbert L. (eds.) *Toward a grammar of Proto-Germanic*. 175-209. Tübingen: Niemeyer.
- Cowgill, Warren 1960 Gothic *iddja* and Old English *ēode*. *Language* 36: 483-501.
- Eichner, Heiner 1973 Die Etymologie von heth. *mehur*. *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 31: 53-107.
- Fortson IV, Benjamin W. 2004 *Indo-European language and culture: An introduction*. Oxford: Blackwell.
- Gotō, Toshifumi forthcoming *Old Indo-Aryan morphology and its Indo-Iranian background*.
- Hirt, Hermann 1921 *Indogermanische Grammatik*, Vol. II: *Der indogermanische Vokalismus*. Heidelberg: Winter.
- 1932 *Handbuch des Urgermanischen*, Part II: *Stammbildungs- und Flexionslehre*. Heidelberg: Winter.
- Jasanoff, Jay H. 1991 The ablaut of the root aorist optative in Proto-Indo-European. *Münchener*

63 古英語の過去複数形 *swæfon* [swæ:von] は二通りの解釈が可能である。ひとつは、母音間の <f> が元々の *f を受け継いでいるというものであり、もう一方は、この <f> がゲルマン祖語においてヴェルナーの法則が適用された結果生じた *f を反映する /v/ を表している (Wright and Wright 1925: pp.154-155 §293参照) というものである。同様に古ノルド語の *svófum/sófum* の解釈も両義的であり、ゲルマン祖語 *swæf- と *swæb- のうちどちらを反映しているか決定できない (PGmc. *gæbhum > ON *gófo* ‘we gave’ となる事例と比較されたい)。

Studien zur Sprachwissenschaft 52: 101-122.

- 1994 Germanic. In Bader, Françoise (ed.) *Langues indo-européennes*. 251-280. Paris: CNR.
 - 1997 Gothic Avestan *cikōitərəš*. In Lubotsky, Alexander (ed.) *Sound law and analogy: Papers in honor of Robert S. P. Beekes on the occasion of his 60th birthday*. 119-130. Amsterdam: Rodopi.
 - 1998 The thematic conjugation revisited. In Jasanoff, Jay, Melchert, H. Craig and Oliver, Lisi (eds.) *Mir curad: Studies presented to Calvert Watkins*. 301-316. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
 - 2003 *Hittite and the Indo-European verb*. Oxford: Oxford University Press.
 - 2007 From reduplication to ablaut: The class VII strong verbs of Northwest Germanic. *Historische Sprachforschung* 120: 241-284.
 - 2010 Long-vowel preterites in Indo-European. A paper read at the 2010 UCLA workshop (Arbeitstagung) on the Indo-European verb (A pdf downloaded from <http://www.people.fas.harvard.edu/~jasanoff/publications.html>).
- Klingenschmitt, Gert 1982 *Das altarmenische Verbum*. Wiesbaden: Reichert.
- Krahe, Hans and Wolfgang Meid 1969 *Germanische Sprachwissenschaft*. 7th edition, 3 vols. Berlin: Walter de Gruyter.
- Kümmel, Martin Joachim 2000 *Das Perfekt im Indoiranischen: Eine Untersuchung der Form und Funktion einer ererbten Kategorie des Verbums und ihrer Weiterentwicklung in den altindischen Sprachen*. Wiesbaden: Reichert.
- Kuryłowicz, Jerzy 1956 *L'apophonie en indo-européen*. Wrocław: Zakład imienia Ossolińskich.
- 1968 *Indogermanische Grammatik*, Vol. II: *Akzent, Ablaut*. Heidelberg: Winter.
- Laker, Neale J. 2001 The lengthened grade in the Germanic 4th and 5th class strong verbs. In Watts Sheila, West, Jonathan and Solms, Hans-Joachim (eds.) *Zur Verbmorphologie germanischer Sprachen*. 19-28. Tübingen: Niemeyer.
- LIV*² = Rix, Helmut, Kümmel, Martin, Zehnder, Thomas, Lipp, Reiner and Schirmer, Brigitte (comp.) 2001 *Lexikon der indogermanischen Verben: Die Wurzeln und ihre Primärstambildungen*, 2nd edition. Wiesbaden: Reichert.
- Loewe, Richard 1911 *Germanische Sprachwissenschaft*, 2nd edition. Leipzig: Göschen.
- (translated and edited by J. D. Jones) 1913 *Germanic philology*. London: Allen.
- Lorentz, Friedrich 1898 Zu den germanischen *jo*-Präsentien. *Indogermanische Forschungen* 8: 68-122.
- Mailhammer, Robert 2006 On the origin of the Germanic strong verb system. *Sprachwissenschaft* 31: 1-52.
- 2007 *The Germanic strong verbs: Foundations and development of a new system*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Matzel, Klaus 1970 Zum System der starken Verben des Germanischen. In Tilakasiri, J. (ed.) *Añjali, Papers on Indology and Buddhism: A felicitation volume presented to Oliver Hector de Alwis Wijesekera on his sixtieth birthday*. 173-181. Peradeniya: The Felicitation Volume Editorial Committee, University of Ceylon.

- Mayrhofer, Manfred 1986 *Indogermanische Grammatik*, Vol. 1/2: *Lautlehre*. Heidelberg: Winter.
- 2004 *Die Hauptprobleme der indogermanischen Lautlehre seit Bechtel*. Wien: Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Meier-Brügger, Michael (in cooperation with Matthias Fritz and Manfred Mayrhofer; translated by Charles Gertmenian) 2003 *Indo-European linguistics*, 8th edition. Berlin and New York: de Gruyter.
- Meiser, Gerhard 1998 *Historische Laut- und Formenlehre der lateinischen Sprache*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Mottausch, Karl-Heinz 2000. Das Präteritum der 4. und 5. starken Verbklassen im Germanischen. *North-Western European Language Evolution* 36: 45-58.
- Narten, Johanna 1968 Zum “proterodynamischen” Wurzelpräsens. In Heesterman J. C., Schokker, G. H. and Subramoniam, V. L. (eds.) *Pratidānam: Indian, Iranian and Indo-European studies presented to Franciscus Bernardus Jacobus Kuiper on his sixtieth birthday*. 9-19. The Hague: Mouton.
- NIL* = Dagmar S. Wodtko, Britta Irslinger and Carolin Schneider (comp.) 2008 *Nomina im indogermanischen Lexikon*. Heidelberg: Winter.
- Peters, Martin 1980 *Untersuchungen zur Vertretung der indogermanischen Laryngale im Griechischen*. Wien: Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Pike, Moss 2009 The Indo-European long-vowel preterite: New Latin evidence. In Rasmussen, Jens Elmegård and Olander, Thomas (eds.) *Internal reconstruction in Indo-European, methods, results, and problems: Section papers from the XVI international conference on historical linguistics, University of Copenhagen, 11th-15th August, 2003*. 205-212. Copenhagen: Museum Tusulanum.
- Prokosch, Eduard 1939 *A comparative Germanic grammar*. Philadelphia: Linguistic Society of America.
- Ramat, Paolo 1981 *Einführung in das Germanische*. Tübingen: Niemeyer.
- Ringe, Don 2006 *A linguistic history of English*, vol. 1: *From Proto-Indo-European to Proto-Germanic*. Oxford, New York: Oxford University Press.
- 2011 Review: Tanaka, Toshiya. *A morphological conflation approach to the historical development of preterite-present Verbs: Old English, Proto-Germanic, and Proto-Indo-European*. Fukuoka 2011: Hana-Shoin. xiv + 320 pp. *The Journal of Indo-European Studies* 39: 503-507.
- Schumacher, Stefan 1998 Eine alte Crux, eine neue Hypothese: gotisch *iddja*, altenglisch *ēode*. *Die Sprache* 40: 179-201.
- 2005 ‘Langvokalisches Perfekta’ in indogermanischen Einzelsprachen und ihr grundsprachlicher Hintergrund. In Meiser, Gerhard and Hacksten, Olav (eds.) *Sprachkontakt und Sprachwandel. Akten der XI. Fachtagung der Indogermanischen Gesellschaft, 17. – 23. September, Halle an der Saale*. 591-626. Wiesbaden: Reichert.
- Seebold, Elmar (comp.) 1970 *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben*. The Hague: Mouton.

- Sihler, Andrew L. 1995 *New comparative grammar of Greek and Latin*. New York: Oxford University Press.
- Streitberg, Wilhelm 1896 *Urgermanische Grammatik*. Heidelberg: Winter.
- Szemerényi, Oswald J. L. 1996 *Introduction to Indo-European linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Tanaka, Toshiya 2009 The Proto-Germanic third person plural strong preterite and the Proto-Indo-European ‘type I’ thematic present formations: With special reference to the strong IV and V classes. *Gengo Kagaku (Linguistic Science, Kyushu University)* 44: 1-23.
- 2010 Osthoff’s law and the rise of the strong I-III preterite formations in Proto-Germanic. *Gengo Bunka Ronkyu (Studies in Languages and Cultures, Kyushu University)* 25: 7-21.
- 2011 *A morphological conflation approach to the historical development of preterite-present verbs: Old English, Proto-Germanic, and Proto-Indo-European* (The faculty of languages and cultures library II). Fukuoka: Hana Shoin.
- MS Acrostic and amphikinetic verbal roots underlying the Proto-Germanic strong class V verb morphology and the act of Verner’s law on the preterite plural formations. Unpublished paper, Kyushu University.
- Tichy, Eva (translated by James E. Cathey) 2006 *A survey of Proto-Indo-European*. Bremen: Hempen.
- Watkins, Calvert 1969 *Indogermanische Grammatik*, Vol. III: *Formenlehre*, Part I: *Geschichte der indogermanischen Verbalflexion*. Heidelberg: Winter.
- Weiss, Michael 1993 *Studies in Italic nominal morphology*. Doctoral dissertation, Cornell University. Ithaca, New York.
- 2009. *Outline of the historical and comparative grammar of Latin*. Ann Arbor: Beech Stave.
- Wright, Joseph and Elizabeth Mary Wright 1925. *Old English grammar*, 3rd edition. London: Oxford University Press.